

創基 200 周年

山口大学誕生

山口大学の 来た道 4

目次

- 1 混迷から新しい時代へ
- 4 各高专校の戦後
 - 官立山口高等学校
 - 官立山口師範学校
 - 官立山口経済専門学校
 - 官立宇部工業専門学校
 - 山口県立山口獣医畜産専門学校
 - 山口県立医学専門学校
- 21 総合大学の設立へ向けて
- 29 山口大学誕生
- 45 防長新聞に見る総合大学設立運動
- 55 年表・参考資料

山口大学鳥瞰図

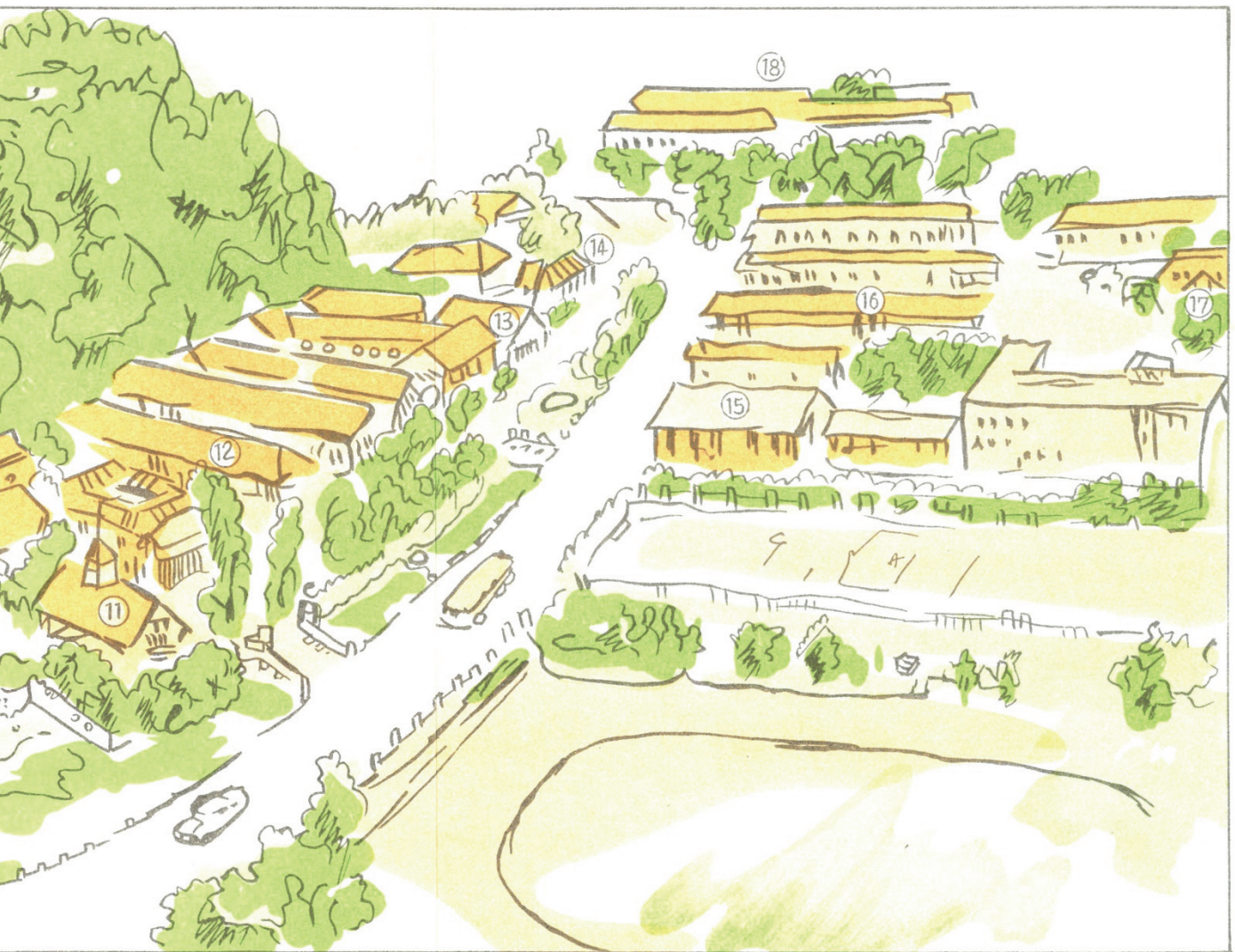


- | | | |
|-----------|-----------|----------|
| ① 大学本部 | ④ 附属山口中学校 | ⑦ 教育学部 |
| ② 学生健康相談所 | ⑤ 附属山口小学校 | ⑧ 教育学部講堂 |
| ③ 時 苑 寮 | ⑥ 鴻 南 寮 | ⑨ 学生相談所 |

第二次世界大戦の終結により、日本の社会は一変した。GHQ主導のもと、非軍事化、民主化を目指し戦前の様々な制度が見直され、改革が行われた。中でも、教育改革は今後の国家を作り上げる土台として重要視され、軍国主義的要素を排除した民主主義的理念のもと、新たに「教育基本法」「学校教育法」が制定された。これにより、6・3・3・4制の学校制度や男女共学が発足した。

一方、戦後再開された学園は、混迷の中にあいながらも学生たちの若い力や教員たちの熱意によって、次第に活気を取り戻していった。そして間もなく、新学制により高等教育機関は4年制の大学に一本化されることとなったため、各校では大学昇格を目指し運動が展開された。大学設置運動は、学校関係者だけではなく県や市を挙げて行われ多くの人の力が注がれた。

そして昭和24(1949)年、県民の熱意に支えられ山口大学が誕生した。



- | | | |
|----------|----------|-----------|
| ⑩ 図書館 | ⑬ 学生ホール | ⑯ 文理学部 |
| ⑪ 経済学部講堂 | ⑭ 鳳陽会館食堂 | ⑰ 文理学部記念館 |
| ⑫ 経済学部 | ⑮ 体育館 | ⑱ 鳳陽寮 |

混迷から新しい時代へ

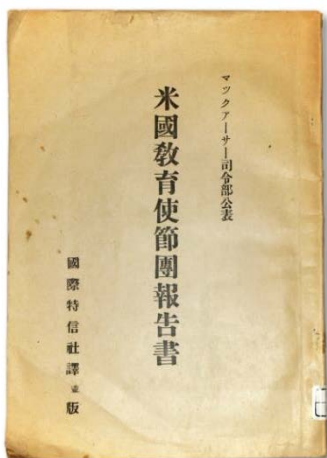
新しい教育へ

昭和20(1945)年8月15日に終戦を迎え、日本の国政全般は連合国最高司令官総司令部(以下、GHQ)の占領のもとに置かれることとなった。これまでの国の政策が大きな変革を迫られる中で、教育においてもまた、旧体制の清算と新しい教育理念の啓発・普及が行われた。

戦争末期には、学徒動員や勤労働員により、大部分の学生が学園を去り、教育はもはやその機能を失っていた。文部省は、終戦を迎えた翌日の8月16日には学徒動員の解除を通達、28日には9月中旬からの授業再開を指示するなど、戦時体制から平時体制への復帰を急いだ。

昭和20年9月15日、文部省は「新日本建設の教育方針」を発表し、自由の尊重や画一的教育方法の打破、個性の完成を新教育方針として示したが、GHQからは10月22日の「日本教育制度の管理」に関する指令とこれに引き続く3つの指令が出され、軍国主義的、極端な国家主義的な思想及び教育の排除を目的とする厳しい措置が取られた。この指令により、教員の適格審査や、教科目・教科書の刷新、学校における神道の禁止などが実施され、新しい教育を作り上げる地盤が整備された。また女子教育の振興が図られたのもこの時期であった。

昭和21年3月、米国教育使節団が来日し、翌月には視察を含む調査、検討の結果をまとめた「第一次米国教育使節団報告書」が発表された。この報告書では、個人の尊厳、能力や適性に応じた教育機会の付与、教育における教師の自由などを基本的理念とし、新しい学校制度として6・3・3制と6・3の義務制、男女共学を勧告している。GHQは、今後の日本の教育改革の路線を、この報告書にそったものとする意向を発表した。同年5月に文部省から発表された教師のための手引書「新教育指針」も、使節団報告書と同じ理念のもとに書かれている。



『米國教育使節團報告書』

同年11月3日、「日本国憲法」が公布され、教育は初めて国の基本に関する定めの一つとして取り上げられた。そして昭和22年3月、憲法に基づき、教育の基本的なあり方を示した「教育基本法」が制定される。これによって、民主的教育体制が確立されるとともに、戦後の新しい教育へとさらに改革が進められた。



教員の適格審査調査表綴り
(山口経済専門学校)

学園への復帰

戦時中、高等教育は理工科系統の拡充、在学年限の短縮、学徒動員や勤労働員など、学校教育の中でも戦争の影響を強く受けていた。文部省は、昭和20(1945)年8月28日に復員学徒について卒業・復学の措置を定めたのを皮切りに、戦時体制下で中断を余儀なくされた学生の受け入れに関する通知を相次いで出した。

戦後、山口にも戦争で各地に散らばっていた学生たちが戻ってきた。社会情勢の激変により、経済的事情などで学窓を去ること

を余儀なくされた者もいた。一方、復員者に対して学年の編入が認められていたこともあり、さまざまな経歴の学生が入学した。9月頃から徐々に授業が再開されていったが、戦後の社会的・経済的混乱の中で、教科書やノートもままならない状態でのスタートとなった。

また、食糧難は深刻で、時には授業を繰り合わせ、食糧確保のために校庭などあらゆるところを開墾した。旧制山口高等学校(以下、旧山高)でも昭和21年3月頃には農園運営委員会を作り、校舎内外と旧射撃場の2町6反(東京ドーム半分くらいの土地)の農園を運営していた。また、土曜日の午後になると、自宅へ食糧を取りに帰るためにリュックを担いで山口駅へ向かう寮生の姿が多く見られた。

このような状況の中、学園生活はままならず、夏休みを延長したり「食糧休暇」を設けたりすることもあった。



山口経専の寮日誌

「若き者は夢を持たねばならぬ」と新しい時代に生きる若者を激励するような一文も見られる。



当時の開墾の様子



学校でとれた芋を食べる学生たち

学園の民主化

戦後、学園に復帰した学生たちは、激しいインフレや食糧難、荒廃した学園という状況の中で学園民主化闘争に立ち上がった。特にインフレによる物価の高騰により、授業料は大幅な値上げとなっていた。各学園では、民主的自治活動として組織された学生自治会の動きも次第に活発になり、昭和23(1948)年9月には、全国的組織として全日本学生自治会総連合(全学連)が結成された。

旧山高では昭和23年6月に生徒の自治会が誕生し、授業料値上げに反対する同盟休校を決行、12月には大学管理法案をめぐって教授会と衝突しストライキという事態も起こった。また、山口経済専門学校(以下、山口経専)でも、昭和21年3月の生徒大会を契機に学生自治権確立の意識が高揚し、4月には、学生自治組織の「学友会」が組織された。

新しい時代の混乱の中で、学生たちはただ状況に流されるのではなく、時代と向き合い積極的に自らの道を切り開こうとしていた。



学生たちの集会の様子(同右)

新学制に向けて

昭和22年3月の「教育基本法」と同時に、「学校教育法」も制定された。「学校教育法」は新教育制度の骨組みとなる教育改革を具体化したもので、従来は学校の種類毎に定められていた学校令を単一化し定めた。また、教育機関の均等化、学制の単純化、義務教育年限の延長、大学院の制度化、と内容面でも非常に画期的なものであった。特に学制の単純化では、新学制として6年制の小学校に続く中等教育を3年制の中学校と3年制の高等学校に単純化し、高等教育機関は4年制の大学に一本化した。

昭和22年4月から「学校教育法」は施行され、新制の学校は、22年の小学校及び中学校の発足からスタートし、大学は24年に発足することとなった。

これにより県内の各高等学校、専門学校でも、大学昇格へ向けての動きが活発になっていった。

官立山口高等学校

全国に先駆け男女共学に

昭和20(1945)年9月、旧山高は県内でもいち早く授業を再開した。しかし戦時中、十分に勉学に励むことができなかつたため、授業についていけず学校を辞めざるを得ない者もいた。また、戦後の食糧難による試験や授業のボイコットなど、混乱は長く続いた。

戦後最初の入学試験は昭和21年4月に行われた。募集人員は文科80名、理科160名であったが、第一次試験の合格者の5割以上を軍関係諸学校からの受験者が占めた。

昭和22年、旧山高は全国に先駆けて男女共学制となる。しかし男女共学にあたっては、生徒の中で大議論が起こり、講堂で何時間にもわたる話し合いがもたれた。当初は反対派が多かったが、「真理の前に男女の差はない。日本もデモクラシーになる。男女同権の時代である。いずれ女性に門戸を開かざるを得ないとすれば、むしろ山高が全国に先駆けて門戸を開き、わが山高からマダム・キュリーを出そうではないか！」という声で空気が変わったという。

昭和22年に1人、翌23年に1人の女子学生が入学したが、学制改革により、23年度の入学生は在学期間1年で、翌年には大学へ進学したため、旧山高で3年間の課程を修了した女子学生はただ1人であった。



文芸部「鴻峰」復刊号
復刊の辞には、「建設へと我々は急ごう」と、新しい時代へと向かう気概が現れている。

復活した野球戦 (対旧制松山高等学校)

旧山高の学生生活と言えば、野球部の対旧制松山高等学校戦が有名である。昭和21年の2月頃、突然、旧松高生2名が旧山高を訪れ、定期戦を復活しようという話になった。松山で行うこととなったが、戦時中にグラウンドのバックネットは供出され、その上、グラウンドは耕されて畑になってしまっていたため、とても野球ができる状態ではなかった。そこで、松山中学校のグラウンドでバックネット代わりに霞網を張って行った。延長10回の末、ようやく3対2で旧山高が勝利を収めた。対旧松高戦は旧山高終焉を迎える昭和24年まで続いた。



大学への昇格運動

昭和22(1947)年、学制改革により、旧山高は学校廃止か大学への昇格か、いずれかの選択を求められ、8月に大学への昇格運動をスタートした。

第1案は「文学部、理学部を設置し、あわせて新制高校の教員養成もかねた独立の文理科大学」、第2案は「県内の高専、高校による大学連合中の文理科大学」とし、文理科大学への昇格を目指した。9月に教職員や山口在住の同窓会員による「山口文理科大学設立後援会」が発足、10月には「昇格人形」という人形を1個20円で売り出し、2,000個を売却するなど、500万円を目標に募金活動を始めた。

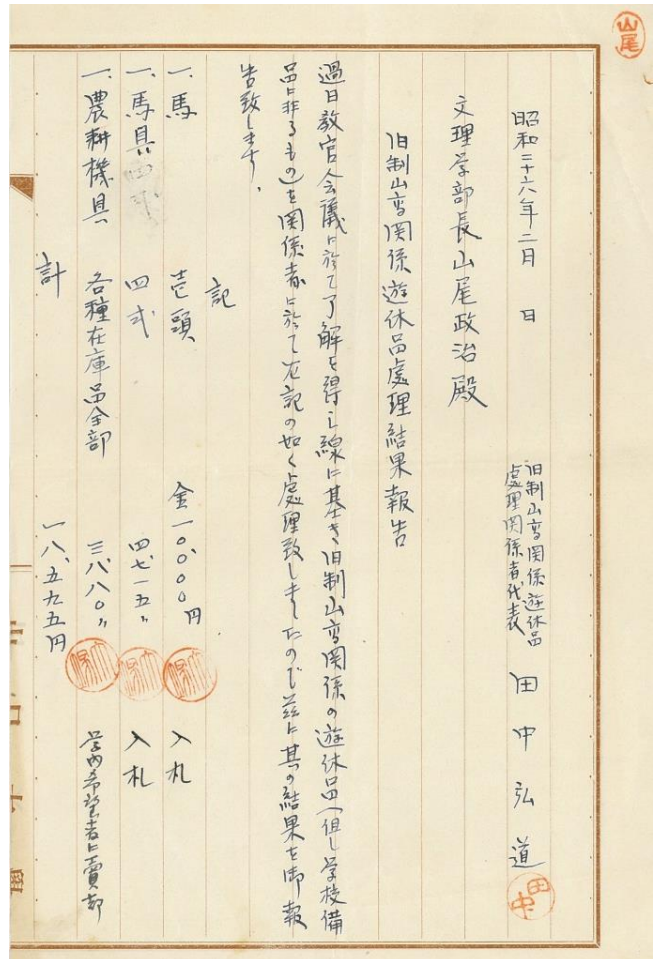
このような文理科大学へ向けた旧山高の動きの一方で、国や県の方針により、当時の長崎太郎校長が中心となって、総合大学設立へ向けた昇格運動を活発化させた。校内では学制改革に反発する声もあり、長崎校長追放のストライキも起こった。

山高の終焉

昇格運動の末、旧山高は昭和24年6月から山口大学文理学部として新たな道を歩むこととなった。文理学部発足後も、旧山高には22年度入学の学生(29回生)が最後の卒業生として残っていた。旧山高の昇格、山口大学設立に尽力した長崎校長は6月6日付で依頼退職し、後任の校長は山口大学初代学長・松山基範が兼任した。11月には、旧制福岡高等学校長・山尾政治が山口大学文理学部長に任ぜられ、旧山高校長を兼任し、最後の校長を務めた。

そして昭和25年3月、最後の卒業生を送り、旧山高はその門を閉じた。

大正8(1919)年の創立以来、124名の教職員が奉職し、4,600余名の卒業生を送り出した。現在の糸米の地には、旧制山口中学校を礎とした、県立山口高等学校が建っている。その校門を入ってすぐ左には、旧山高の講堂が、登録有形文化財として保存され、かつての栄光を物語っている。



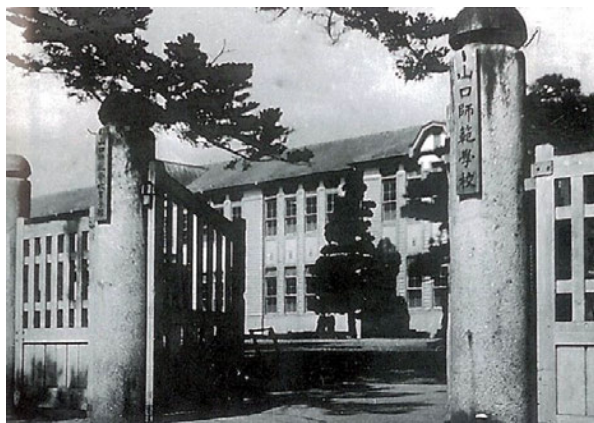
「旧制山高関係遊休品処理結果報告」(昭和26年2月)

山尾文理学部長宛 旧山高の学校備品以外のもの、馬や馬具、農耕機具を売り払った報告がされている。

官立山口師範学校

戦後の教育改革では教員養成についても見直しが行われ、師範学校は大きな転換を迎えることとなった。教育における教師の自由と、それを実現すべく専門職としての教職の確立が目指された。

戦後間もなくGHQの指令により教職の適格審査が行われる一方、昭和21(1946)年4月の「第一次米国教育施設団報告書」では、4年制課程の大学段階の教員養成が勧告されている。同年8月に設けられた教育刷新委員会は、2度の建議において教員養成を大学で行うこと、小・中学校の教員を養成するために学芸大学・学部を設置することを主張した。昭和23年6月、文部省は新制国立大学の設置に関して「十一原則」を発表し、その中で一府県一大学の実現を図ること、各都道府県には必ず教職に関する学部を置くことが示された。新学制による新制大学の発足により、山口師範学校は明治7(1874)年4月の教員養成所の創立以来77年間の歴史が閉じられた。



山口師範学校(男子部)(昭和23年頃)



山口師範学校(女子部)(昭和23年頃)

全寮制から通学制へ

戦後、山口師範学校でも学徒動員等で学舎を離れていた学生たちが続々と戻ってきたが、社会経済情勢の激変により、進路を変えることを余儀なくされた者も多かった。

山口師範学校では全寮制をとっていたが、経済的理由から通学でなければ学費が払えない学生も出てきたため、男子部の学生が室積の女子部に、また女子部の学生が山口の男子部に、それぞれ通学することが許された。山口師範学校における男女共学のはじまりでもあった。

またこの頃、女子部の山口市移転問題が持ち上がった。この懸案は昭和18年に県議会で可決されたが、戦争のため実施できないまま終戦を迎えていた。井上宮久校長は新制大学への昇格も見込んで教育内容の充実を図ることなどを理由に移転運動を推進したが、移転費用の問題や地元からの反対があり、またも実現せず立ち消えとなった。

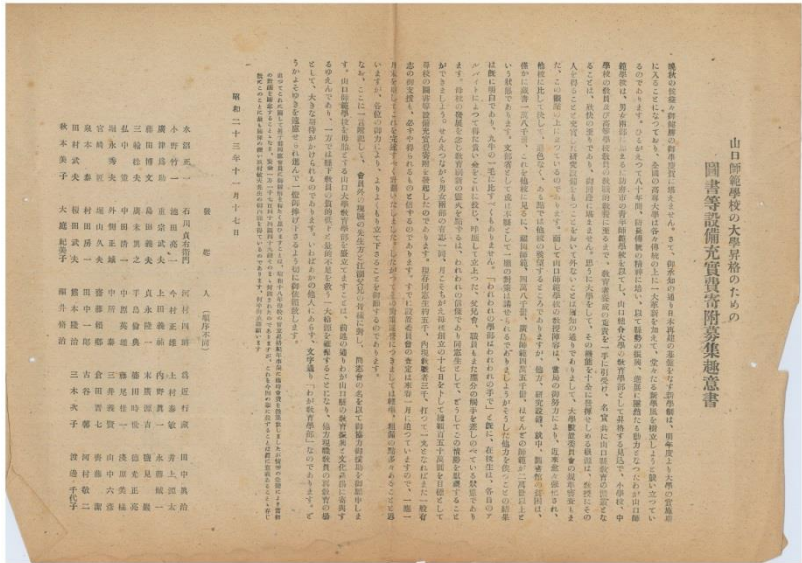
新制大学へ向けての設備充実

昭和21(1946)年からおこった大学昇格運動の中で、新しい教員養成の道を確立することに全力が注がれた。

その状況下、「一般教養図書および経済学部以外の各学部の専門図書および各学部共標本機械器具を整備充実すること」という大学の設置条件を満たしていないことを憂えた師範学校は、卒業生から寄附を募ることとした。昭和23年当時、山口経専の蔵書数が約11万冊だったのに対し、師範学校は約2万冊だった。これでは大学としての任を果たすことはできなかった。同窓会、PTAの寄附、及び教官からの寄贈によって総額92万円が集まり、大学設置基準にふさわしい蔵書数を目指して図書の充実にあてられた。

山口師範学校、山口青年師範学校の教官は全員教育学部へ移行する予定だったが、教授に認定される者は少なく、どのようにして教育学部教官へと切り替えるかが人事上、重要な課題となった。

こうした諸事情を抱えながらも、昭和24年、師範学校は山口大学教育学部となり、山口師範学校男子部を本校とし、女子部を光分校、山口青年師範学校を防府分校として教員養成の役割を担っていく。ただこの分校制度は研究に何かと不便で、経営面、教育面、予算面等の無駄も多く、統合すべきとの意見が相次いだ。やがて、昭和32年に光分校が、昭和35年には防府分校が山口の地へ統合され、今の形となっていった。



「図書等設備充実費寄附募集趣意書」(昭和23年11月)

山口青年師範学校

青年師範学校は、新しい教育制度の中で、農業教育より教員養成に重きを置くことになったため、その役割を終え、昭和26年、その歴史に幕を閉じた。



官立山口経済専門学校

学友会の復活と学生新聞の復刊

昭和21(1946)年、混沌とした世相と食糧難から冬季休暇は2ヶ月にわたった。この頃から全国的に学生による学園の民主化の動きが見えはじめたが、山口経専でも同年3月、初の生徒大会が開催され、試験制度や出席簿の問題が議論された。

4月の新入生入学とともに、総務部、文化16部、運動13部で構成される学生自治組織「学友会」が復活した。5月下旬には再び生徒大会が開かれ、学生自治の方針に即して生徒の意向を代表し、学校当局と折衝する生徒代表会議が設立された。

また、「山口高商新聞」の廃刊以来10年間途絶えていた学生新聞が、11月1日「山口経専鳳陽新聞」として復刊。学生による学園の復活が少しずつ進み始めていた。

山口経専鳳陽新聞の創刊号



学園の開放

戦後の教育改革により、女子教育の振興が図られ、男女の教育機会均等、相互尊重の方針のもと各校で共学化が進められた。

山口経専でも昭和22年から男女共学が実施された。入学志願者は定員200名に対し、1,197名(中学出身者約1,000名、商業出身者約200名)と狭き門であった。注目された女子志願者は紅一点、わずかに1名であったが入学は果たせなかった。

また、社会教育の徹底と教養知識水準の向上のため、広く一般から聴講生を募集した。聴講生は男女を問わず学科の講義を理解し得る者で、期限は1年以内(事情により継続を許可)、聴講料は1科目につき20円とし、学生と同じ教室で講義を聴講した。特典や資格の付与はされなかったが、聴講が終了すれば聴講証明書が交付された。

インターハイと運動会の復活

昭和21(1946)年10月、戦時中に中断していた西部高専体育大会(インターハイ)が復活した。

熊本市内10か所の競技場で開催され、山口・九州から45校、2,500人が参加した。山口経専からも野球、庭球、排球、ラグビー、陸上競技、蹴球、卓球、籠球の各選手が出場した。



山口・九州地区インターハイ(昭和21年夏・熊本)

同年11月には、戦時中に影をひそめていた名物・山口経専運動会が復活した。資金の捻出のため、食糧休暇の一日を利用して全校生が駐留軍の兵舎でアルバイトをし、学生の自主的プランによって開幕された。前日に自動車での市内宣伝を行った甲斐もあって、定刻前に大観衆が押し寄せた。戦時中に耕されていたグラウンドも整備され、応援旗が立ち並んだ。プログラムも趣向がこらされ、仮装行列では大観衆の爆笑がどよめき、日本ニュース(昭和15年から終戦をはさみ昭和26年まで制作されたニュース映画)が取材するほど盛況であった。大会の最後には全校の大ストームを敢行して幕を閉じた。



秋季大運動会の様子を伝える記事
(「山口経専鳳陽新聞」昭和21年12月10日)

昇格運動の活発化

学制改革の動きとともに、高等専門学校の大学昇格運動が各所で活発化する中、山口経専では、学校の質的向上を図るため、校地の拡張、調査研究所の設置、教官研究室の拡充が行われた。校地拡張のために亀山公園買収の計画が進められ、商品資料館を改造し研究室の整備を図り、全国最初の学校博物館として建築されることとなった。これに要する資金は鳳陽会が中心となって生徒の協力により募集した。

昭和23年、県内の高等専門学校や県知事、県会議員などで構成される山口総合大学設立期成会が発足し、山口経専の浅野孝之校長も上京し文部省に大学設置申請書を提出するなど、大学昇格運動が本格化した。結局、山口経専は昭和24年、山口大学の経済学部となることになり、大学の本部は経済学部に移されることとなった。

昭和26年3月8日、山口経専は最後の卒業式を行い、その歴史を閉じた。

官立宇部工業専門学校

終戦直後の学園

終戦後間もない昭和20(1945)年9月20日、官立宇部工業専門学校(以下、宇部工専)から3年生364名が混乱を極める社会へと送り出された。動員先の工場や鉱山から復学した1年生、2年生の授業は9月から再開されたが、終戦直後の虚脱状態や悪化した食糧事情などにより、まともな授業は望むべくもなかった。



昭和22年の工専校舎

同年12月4日、戦時中に軍国主義に加担し、故意に学生達を締め上げたと言われた教官たちの追放を学校当局に要求すべく、武道場で学生大会が開かれた。ストライキが決議され、学校側が学生の要求を全面的に受け入れる結果となり、当時の村山梅吉校長は「責任のすべては自分にある」と明言した。この年は冬休みが繰り上げて実施され、学期末試験も延期された。

昭和21年1月、戦地から復員した旧制中学卒業者を一時的に収容するため、化学工業科に修業年限1ヶ年の専修科を併設した。また、陸軍士官学校、海軍兵学校など軍関係学校や、外地の専門学校に在籍していた学生たちも編入や転入学してきたため、当時の各クラスは個性あふれた若者たちの集団となった。同年4月、戦後の精密機械工業の必要性から、機械科に精密機械分科が設置された。

初の女子学生入学

戦後の教育改革で女子教育の振興が進む中、各校で男女共学がスタートしはじめていた。宇部工専でも昭和22年4月、初めて3名の女子学生が工業化学科に入学した。3名とも地元の県立宇部高等女学校(以下、宇部高女)の出身であった。実はこの入学に先駆けて、宇部工専の学生数名が宇部高女に乗り込み、体育館に女生徒を集め宇部工専の宣伝と受験の勧誘を行った。ちょうど当時、ノーベル物理学賞と化学賞を受賞したマリー・キュリーの伝記映画「キュリー夫人」が映画館で上映されており、「マダム・キュリーを目指す者は来たれ！」との呼びかけが功を奏したのか、翌年の春には初の女子学生を宇部工専に迎えることができたのである。

ちなみに、女子学生のうちの一人は、受験生中トップの成績だったという。

物資の不足と整備

宇部工専の校舎は幸いにも戦災を免れたが、戦後の物資不足は深刻で、教育のための設備整備はままならない状況であった。このため旧軍や軍需工場からの払い下げ物資も活用し整備を図った。

戦後、徳山海軍燃料廠の地下壕に外国学術雑誌や専門書が放置されたままになっていることが分かり、外国文献の不足に苦慮していた宇部工専では早速徳山まで引き取りに向かった。これら資料は、当時としても大変貴重な文献で、宇部工専の大学昇格審査の際にも、評価のポイントとなったという。移管手続き後は、「旧徳山海軍燃料廠移管図書」として山口大学附属図書館の工学部分館に保管され、長らく学内外の利用に供された。現在これらの図書は、周南市立中央図書館へ移管されている。



旧徳山海軍燃料廠移管図書を保管していた書庫
当時の工専唯一の不燃性の建物である。

山口大学工学部へ

新学制の実施に伴い、昭和23(1948)年1月、市の有力者たちが名を連ねた「宇部工専大学昇格後援会」が発足し、大学工学部として要求された研究施設や実験設備の充実に資金を提供するなどの、組織立った支援がなされた。

昭和24年5月31日、山口大学が開学し、宇部工専は山口大学工学部として新たなスタートを切った。昭和26年3月8日、宇部工専最後の卒業式が挙行された。これにより、昭和14年の宇部高等工業学校(以下、宇部工高)以来、3,000名を超える卒業生を戦中戦後の混乱の世に送り出した宇部工専は幕を閉じることとなった。

湯川秀樹博士来校

昭和22年6月6日、京都大学の湯川秀樹博士が来校し、「現代の物理学」と題して講演した。中間子理論により世界的に著名であった博士の姿を見ようと、多くの学生たちがその講演会に参加した。2年後の昭和24年、湯川博士は日本人として初めてのノーベル物理学賞を受賞した。

校長官舎前で

左から山本武夫教授、湯川秀樹博士、
村山梅吉校長、松山英太郎教授



学生たちの青春

終戦後の物資不足や食糧難の中でも、学生たちは寮祭や学内講演会や演奏会、運動会などを積極的に催し、青春を謳歌した。これらの催しには、町からも多くの人たちが常盤台へと足を運んだ。

また、この時代の学生の最大の楽しみは映画であった。学生たちは「宇部セントラル劇場」や「新川座」などの映画館に足繁く通った。学生の料金は安く、50銭位であったという。月2回、渡辺翁記念会館で上映されたフランス映画やアメリカ・ハリウッド映画などの洋画は学生たちの西洋文明に対する乾きを癒した。



(上)運動会での仮装行列

(右上)放課後のバスケットボール

(右中)寮祭での演劇

(右下)新川座

同窓会の発足

同窓会は、昭和16(1941)年の宇部工高の時代からすでにその設立が計画されていたが、戦争により頓挫していた。昭和21年11月、卒業生有志の間で同窓会設立の気運が高まり、母校在職者が中心となって、「宇部工専同窓会」を正式に発足させた。昭和22年5月、開校記念日に合わせて同窓生の集いを催し、学内公開の展示物や創立記念日の出し物であった演劇の中で優秀なものに対し同窓会賞を贈った。この後も、図書館整備資金や校史編纂のための寄附金集め、運動会・寮祭への協賛、大学昇格運動の支援など、多方面にわたって母校の活動と発展を支えた。

昭和28年4月、大学昇格後初めての卒業生が巣立ったのを機に「宇部工専同窓会」は発展的に解消され、宇部工高・工専と新制工学部の全卒業生を対象とする同窓会「常盤工業会」が発足した。

山口県立山口獣医畜産専門学校

混乱の再スタート

山口獣医畜産専門学校(以下、山口獣医専)では、食糧不足から生徒の健康状態が極度に悪化したため授業を中止し、寮も閉鎖していたが、結局そのまま終戦を迎えることとなった。終戦後、1年生は昭和20(1945)年9月1日より授業を再開、10月には前期試験が実施され後期授業も始まった。2年生は9月末にようやく動員解除となり、10月16日に授業が再開された。また、終戦による措置により陸海軍諸学校出身者や在学者、高等商船学校、外地所在学校の在学者などの編入・転入学が認められた。

教員も復員し、新たな教員も迎え、徐々に体制が整ってきていたが、昭和21年2月に生徒大会開催準備と称して2年生を中心に授業を放棄、学校当局との交渉などにより授業不能の状態が続いた。結局、海老原初太郎校長他3名の教員が辞任し、教員の戦死も重なったため、教員組織の整備は一時中断を余儀なくされた。

海老原校長辞任後、小郡農学校長の青木^{みちひこ}猷彦が山口獣医専の校長も併任することとなった。その後、新たに教員が続々と着任し、教育体制は徐々に整備されていった。しかし、校舎や牧場の整備については県との交渉も進まず、器具器械の購入もままならず、軍からの移管物品で何とか凌ぐ状態であった。

当時、獣医学教育はGHQの公衆衛生福祉部の所轄で、このもとに戦後日本の獣医学教育の改善、向上が図られた。福祉部の担当者による学校視察もしばしば行われたが、山口獣医専の未だ貧弱な設備は大きな問題となっていた。



軍から移管されたリンゲル液

当時の教員たち



伊藤隆治



木脇祐順



北島三郎



小田良治

頓挫した農業専門学校設立計画

戦後の教育改革により新学制が施行されることとなり、山口獣医専でも大きな動きが見られるようになる。

まず、昭和21(1946)年、獣医学教育の刷新と当時の食糧事情に対する関心から小郡農業学校(以下、小郡農校)と山口獣医専とで「農業専門学校」を作る計画が立てられた。先に小郡農校では、11月には山口農専創設期成同盟会が作られ、今後の運動方針や学校経営の構想などが協議された。しかし期成同盟会の計画に青木校長を除く小郡農校の教職員は反対の立場を表明し、対立が深まっていた。

同年12月、この状況の中、山口獣医専の学生は学生大会を開き、設立促進期成運動に立ち上がった。学生たちは、世論に訴える街頭演説を行い、代表者が青柳県知事に請願



青木猷彦校長

書を提出するとともに、NHKラジオ「県民の時間」を利用して、広く県民にその是非を訴えるなど、活発な運動を展開した。

しかし小郡農校側の反対意見も強く、この計画は学制改革の成り行きを見ながら一旦白紙に戻し、新たに提唱された農業大学設立運動へと移行するということが、一応の終止符が打たれた。この問題は校長排斥運動に発展し、青木校長は農業高等学校長の任を解かれ獣医専の校長専任となった。

農業大学設立計画

昭和22年1月、農業専門学校に代わって農業大学設立計画が浮上し、教員も生徒も上京し、関係各方面に陳情を行うなど、積極的な運動を開始した。

やがて学制改革で、国立の新制大学については一府県一大学が原則となり、山口獣医専を国立に移管し、山口青年師範学校とあわせて農学部とすることが田中龍夫県知事から提案された。この提案に対して、一部では反対もあり、結局山口獣医専のみで山口大学の農学部として参加することになったが、小郡の山口獣医専の校地は狭く、設備も依然として貧弱であったため、新たに他に土地と校舎を求める必要があった。



第2回獣医専開学記念祭
(昭和22年6月小郡獣医専にて)

下関移転と農学部への移行準備

農学部設立の土地、校舎について県当局と折衝が重ねられ、下関市の大学誘致運動もあり、進駐軍の撤退で空いた王喜の旧小月航空隊の兵舎が候補に挙げられたが、すぐに移転ができないため、長府町の進駐軍の施設を利用することとし、昭和23(1948)年12月15日に移転した。

この施設は、戦時中に神戸製鋼長府工場に動員された勤労奉仕青年の寄宿舎であったものを、戦後進駐してきたニュージーランド軍が兵舎及びクラブとして使用していたもので、江下のクラブ跡を事務室とし、前八幡の旧八絃寮を教室と研究室に改造、旧興亜寮を生徒の寄宿舎と食堂として使用した。また、附属牧場は、清末の下関農業会の旧試験農場を買収してこれにあてた。



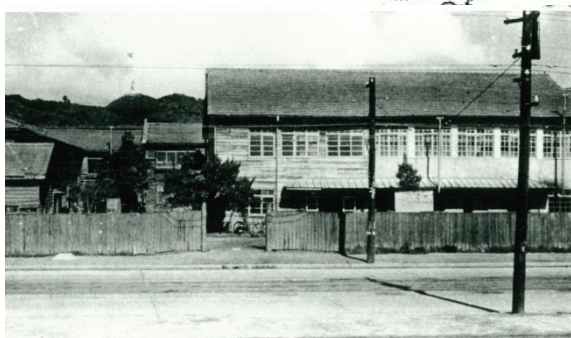
山陽電気の路面電車



附属農場



満珠・干珠



獣医学科校舎



移転感謝祭

昭和24(1949)年3月20・21日、長府への移転を記念して、山口獣医専では移転感謝祭を開催した。



(上)音楽会 (下)活花展



山口大学農学部へ

移転後、設備の整備充実に努め、大学設置委員会の審査を受けた結果、昭和24年4月1日、農学科と獣医学科からなる農学部の設置認可を文部省より得た。10月施行の獣医師法により、正規の大学において4年以上にわたる獣医学の課程を修めて卒業し、国家試験に合格することが獣医師免許の条件となったが、移行措置として、昭和23年4月以降の獣医専の入学者のため農学部に1ヶ年の専攻科を設置した。

山口獣医専は農学部への昇格が決まった昭和24年度から生徒募集を中止したため、昭和27年3月、専攻科の生徒を送り出し廃止となった。昭和19年の発足からわずか8年という非常に短い間であったが、第1回から第5回まで202名の卒業生を社会に送り出した。



山口大学農学部開学記念祭

山口県立医学専門学校

戦後の再スタート

昭和20(1945)年9月も中旬に入った頃、山口県立医学専門学校(以下、山口医専)ではようやく授業が開始された。外地の学校や軍関係の学校、さらには廃校になった学校から多数の転入生を迎え、一時的に学生数が膨れ上がったが、食糧難、学費難等のため学校を去る学生も多かった。

昭和21年3月、富田雅次校長は戦中教育の責任を取り辞職し、松本彰が校長事務をとった。

同年9月、宇部興産同仁病院、東見初病院、宇部市立伝染病院を附属病院として臨床講義、実習が始まった。10月には学校校舎内に内科、外科の仮診療所が開設され、翌年の3月、附属病院長に松本彰校長が就任した。



松本彰校長



仮診療所での外来



臨床実習

開学記念祭

昭和21年、山口医専開校2周年記念として、ソプラノ歌手関種子、ピアノ伴奏に太田道子を招き、渡辺翁記念会館で音楽会を開催した。街頭での切符販売や、列車の乗車券・旅館の手配、出演者に対するギャラの手配など、学生全員が一丸となって準備にあたった。戦後初の生の音楽会とあって広島や福岡からの客もあり大盛況であった。



当時は食糧難のため、出演料の半分は米で払ったらしいよ！



山口医専存続の危機 — A級B級問題 —

戦後の混乱からようやく再スタートをきった山口医専であったが、間もなく存続の危機に立たされた。戦後の教育改革では、医学教育は大学に一本化されることとなり、戦時中に急造された医学専門学校はGHQの審査によりA級校とB級校に選別され、A級校は旧制の医科大学へ昇格、B級になれば廃校となることが決まった。

昭和21(1946)年、山口医専では教職員、学生が一団となり市中行進をし、青柳県知事に要望書を手渡したり、県内に署名を取りに歩いたり熱心な存続活動を行った。また、山口医専がA級と判定されなければ、県内における医学教育の火は消えてしまうため、地元宇部市も昇格運動をはじめた。



(上) 県知事に要望書を手渡す山口医専生
 (右上) 県知事を囲んで昇格歌を歌う山口医専生
 (右) 山口医専の昇格運動を伝える新聞
 (「防長新聞」昭和22年1月20日)

県や市、学校当局、在学生、在京の国会議員、地元企業など一体となった運動が実り、昭和22年4月、山口医専はA級校に認定され、5年制専門学校として、昭和25年まで存続することになった。6月には大学令によって、旧制の山口県立医科大学の設置が認可されるとともに、修業年限3ヶ年の予科の設置も認可された。山口医専の2年生以上の学生は、試験によって予科2年に編入し、同時に予科1年生の入学試験も行われた。

新制山口医科大学の誕生

昭和22(1947)年4月に施行された「学校教育法」により、昭和24年に新制大学が発足することとなり、県内でも、旧制高等学校や旧制専門学校を統合して、総合大学を設立する案が具体化しつつあった。旧制山口県立医科大学では新制大学への昇格を目指し設備の充実を図った。

昭和22年11月、附属病院長に水田信夫が就任し、翌23年11月に第1期、24年3月に第2期工事が竣工、全国一とも言われる設備の附属病院が完成した。

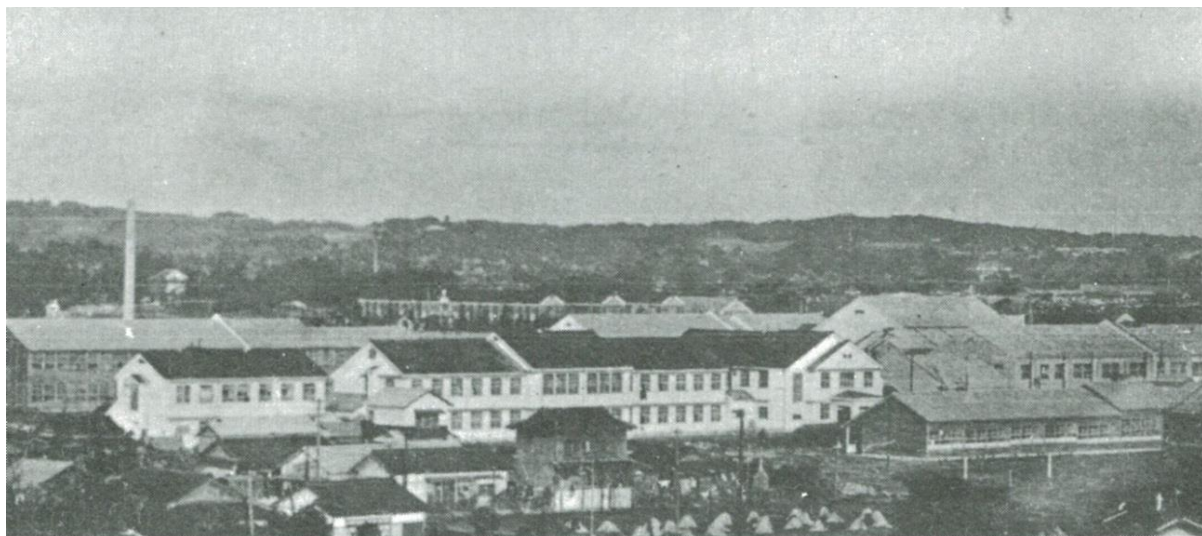
昭和24年3月、山口医専の第1回卒業式が行われ、87名の卒業生を送り出した。そして4月、新制山口県立医科大学が開学し、5月7日に盛大に開学式が行われた。これに伴い予科の募集は無くなり、昭和26年には予科及び山口医専は廃止された。



第1回山口医専卒業記念写真
竣工したばかりの附属病院前



水田信夫附属病院長



旧附属病院全景

総工費5,600万円、総坪数4,000坪、8棟の充実した設備を誇る病院であった。

学生生活



ラグビー部
全国大会に出場



サッカー部



卒業記念ダンスパーティー
昭和22年頃からダンスが流行り、いろいろな場
所でダンスパーティーが催された。



麻雀をする学生



予科の学生



市民館での洋画鑑賞



総合大学の設立へ向けて

昭和 21 年

1946

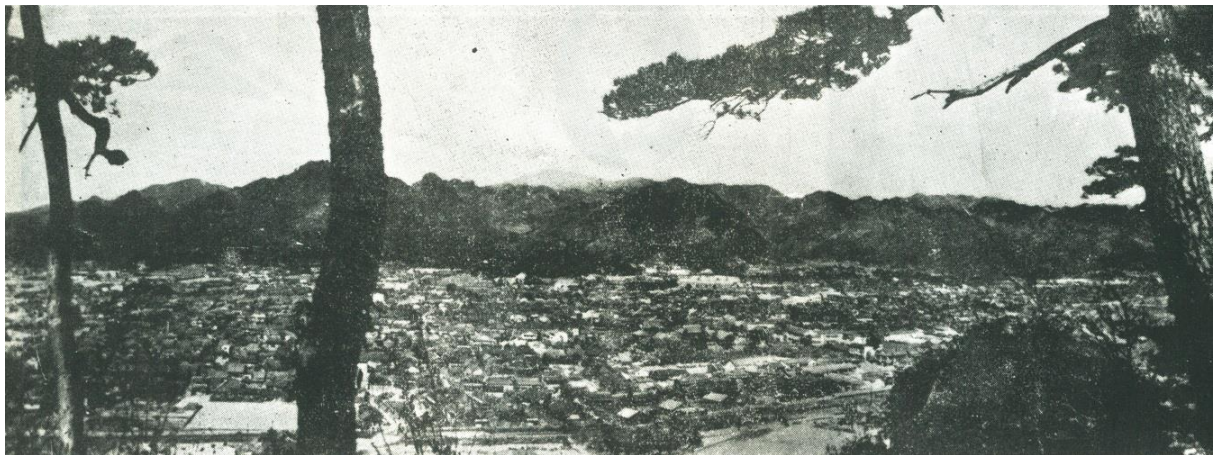
1月 大学設置への兆し

第二次世界大戦が終わり、山口県は新国土計画に基づく新しい街の建設を早急な課題としていた。昭和21(1946)年1月末、県は内務省の諮問に応じて、各市の展望を述べている。その中で、山口市の新構想の一つに総合大学としての防長大学設立計画を挙げた。(P.45に「防長新聞」記事有)

大学設置の気運はこの頃からあったが、より具体的な動きとしては、光市が、原爆戦災により壊滅的打撃を受けた広島文理科大学を誘致しようとしたのが、最初であろう。しかし、光市単独の動きで力が弱かったことと、広島側の引留めにより、実現されなかった。

3月 医学専門学校の大学昇格運動

文部省は、医学専門学校は大学への昇格または廃校という方針を決定した。宇部市の山口医専では、早速昇格運動を始め、当時の県医師会長の渡辺剛二は「医専問題こそ防長大学実現の口火である。幸に防長大学の構成をみるとせば、医科、工科、文科、商科は既に県内の専門学校を編入すればよい」と、一医専の昇格問題ではないことを強調した。山口医専は翌年7月、山口県立医科大学となった。



山口市全景(昭和22年頃)

昭和 22 年

1947

2月-7月 県内各校の大学設置運動

広島文理科大学誘致に失敗した光市では、教育系単科大学の設置を発議した。また、下関市では農林省直轄の水産専門学校である国立下関水産講習所が昭和22年4月に開

校するが、国立大学に昇格する予定であると2月の防長新聞で報じられた。また、下関大洋漁業社長、中部謙吉氏が私財を投じて総合大学をつくる計画もあった。

県下の私学16校には、連合して新制大学をつくる動きが出始めた。4月には、県下に女子の最高学府設置が望ましいとのことから、県立山口女子専門学校(以下、山口女専)でも女子大学昇格の運動が始まった。さらに、防府の山口青年師範学校が教育大学へ、7月には山口経専が商科大学へ、旧山高が法科大学への昇格を目指し、運動が展開された。

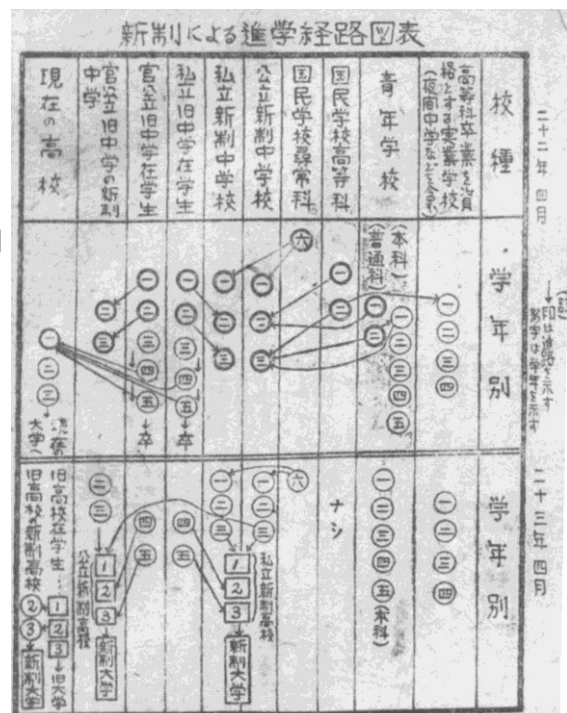
「学校教育法」の公布

明治以来の学校教育が、第二次世界大戦の破局に国民を導いた一要因であるとの深刻な反省に立ち、昭和22年3月、「日本国憲法」及び「教育基本法」の理念に即し「学校教育法」が制定され、6・3・3・4の開放的民主的な新たな学校制度体系が確立された。

これにより、既設の高専校(高校、専門学校、師範)は新制大学へ昇格か、廃校か、新制高等学校かのいずれかを選ばねばなくなり、県内でも大学設置の運動が本格化した。

(右)新学制の説明図

(「防長新聞」昭和22年2月21日)



7月 山口市の構想

山口経専、旧山高、山口女専がそれぞれ昇格運動を始めたのに対して、学校毎の運動では効果が少ないこと、また、かねてより懸案の計画だった教育都市実現のためにも、山口市が調整に乗り出した。市が中心となって運動をおこし、単科大学ではなく総合大学としての昇格を目指すとして発表した。

山下太郎山口市長

(昭和22年度『山口市制要覧』より)



8月 総合大学の実現へ

5日、山口経専で県下高専校長定期集会が開かれ、大学昇格や総合大学設置をめぐる活発な意見交換が行われ、7日には山口市の主催で、市内各高専校長、市議、県議、県行政担当者を招き、総合大学の設立などを提議、宇部市、防府市とも協議して準備委員会設置を早急に行うこととなった。(P.47に「防長新聞」記事有)

12月 政府方針による大きな転機

こうした昇格運動は、22日、大きな転機を迎える。全国教育部長会議より戻った県教育部長が、新制総合大学は中国地方に1校設置するという政府の方針を伝えたのである。総合大学の無かった中国地方の各県、とりわけ岡山、広島、山口の3県が名乗りをあげ、県をあげての総合大学誘致合戦が始まった。

昭和 23年

1948

1月－2月 活発化する誘致合戦

17日、県は、県出身国会議員、県議、県内各高専校、関係市長その他の県内有力団体、在京有力者等を包括した山口総合大学設立期成会を発足させた。県民全体の気持ちを総合大学設置へ向けていく動きが活発になり、防長新聞もしきりに大学関係記事をのせるようになる。2月には、県は「県庁を南山口に移転し、跡地を大学に提供してもよい」という熱意を示した。総合大学誘致にかける県の意欲と期待の大きさがうかがえる。(P.49に「防長新聞」記事有)

4月 連合国総司令部、文部省による視察

6日、GHQ高等教育班の統括者イールズが各高専校を視察した。視察後、イールズは、山口県は施設が立派であり、財界の援助が期待できるため有望であると述べた。特に山口経専と山口師範が隣接していることは非常に有利で、県庁舎を大学として使うならば、県立図書館、博物館など亀山公園を中心に恵まれた学校の配置ができる。また、中国地方に一総合大学という計画は採用されず、一府県一大学計画が有力だと述べた。18日には森戸文部大臣が各校を視察、各県に一総合大学は経済事情や、教授等の人的面で無理がある。山口に経専、広島に文理大、岡山に医大と農科がある現在の特色を生かした連合大学設置も考えられると述べ、中央情勢も混沌としていた。(P.52に「防長新聞」記事有)



旧山口県庁舎(現在の山口県政資料館)

5月 大学設立申請書の提出

4月30日には県下各高専校長、関係市長、同市会議長らで大学設置協議会が開かれ、文理学部、経済学部、工学部、学芸学部の4学部案に基づく「国立山口大学設立申請書」を作成した。さらに、水産学部、農学部、医学部、学芸学部別科という新構想を県がまとめ、追加申請として山口県より文部大臣へ提出した。(P.52に防長新聞記事有)

6月 文部省、設立を慎重に審議

2日、衆議院文教委員会で山口総合大学設立の請願が提出され、山口県出身衆議院議員と、山口県知事が趣旨説明を行った。文部省の意向としては、山口県の5つの官立学校の大学転換は確定的であるが、総合大学の設置は、国の財政問題もあり、現実的に条件のそろっているものから実現されて行くことになると思う、県立学校を官立に転換するのは難しいようだが、条件によっては不可ではないかもしれない、という答弁であった。

また、混沌としていた政府の方針も決定した。GHQの機関である民間情報教育局(CIE)は、大学の大都市集中を避け、また教育の機会均等を図るため、国立大学は一府県一大学に設置するよう、文部省へ要請した。文部省はこれを受けて、新制国立大学設置に関して、「十一原則」を決定した。

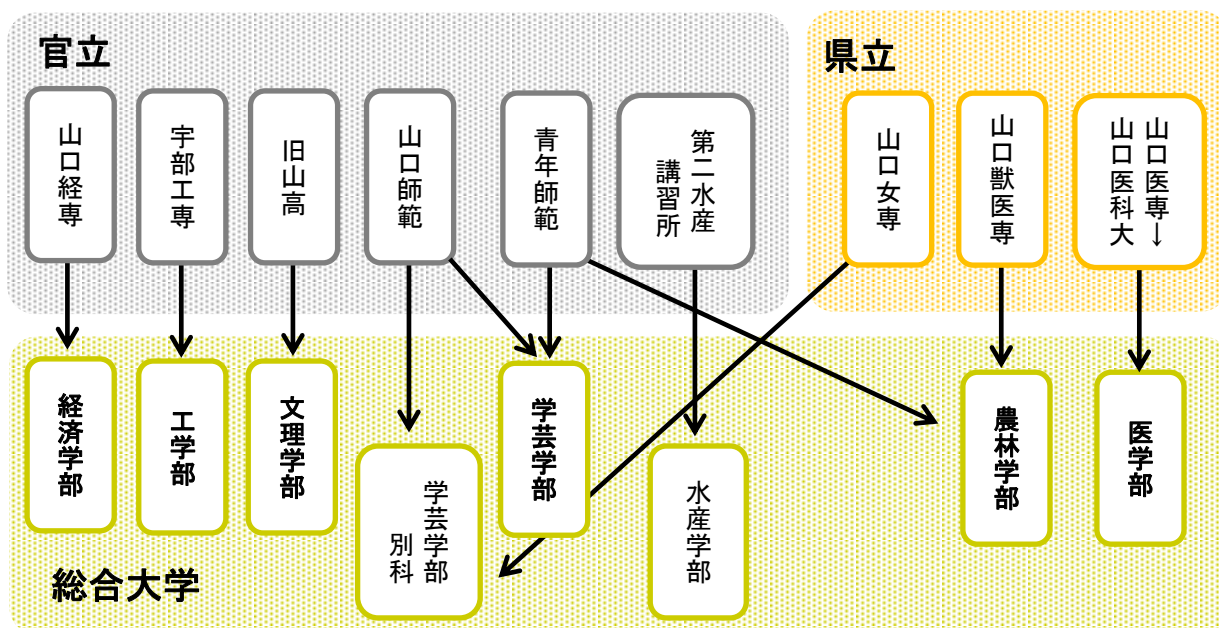
「十一原則」

- (一) 国立大学は、特別の地域（北海道、東京、愛知、大阪、京都、福岡）を除き、同一地域にある官立学校はこれを合併して一大学とし、一府県一大学の実現を図る。
- (二) 国立大学における学部または分校は、他の府県にまたがらないものとする。
- (三) 各都道府県には必ず教養および教職に関する学部もしくは部を置く。
- (四) 国立大学の組織・施設等は、さしあたり現在の学校の組織・施設を基本として編成し、逐年充実を図る。
- (五) 女子教育振興のために、特に国立女子大学を東西二か所に設置する。
- (六) 国立大学は、別科のほかに当分教員養成に関して二年または三年の修業をもって義務教育の教員が養成される課程を置くことができる。
- (七) 都道府県および市において、公立の学校を国立大学の一部として合併したい希望がある場合には、所要の経費等について、地方当局と協議して定める。
- (八) 大学の名称は、原則として、都道府県名を用いるが、その大学および地方の希望によっては、他の名称を用いることができる。
- (九) 国立大学の教員は、これを編成する学校が推薦した者の中から大学設置委員会の審査を経て選定する。
- (十) 国立大学は、原則として、第一学年から発足する。
- (十一) 国立大学への転換の具体的計画については、文部省はできるだけ地方および学校の意見を尊重してこれを定める。意見が一致しないか、または転換の条件が整わない場合には、学校教育法第九十八条の規定により、当分の間存続することができる。

7月 設立申請書受理

文部大臣の諮問機関である大学設置委員会へ提出した「国立山口大学設立申請書」が受理され、第二水産講習所を除く官立5校は一応の目途が立った。山口県立医科大学は、昭和27年を目途に国立移管をすることに決まった。したがって、この時点でほぼ確実となったのは官立5校による4学部と、山口獣医専による農林学部の5学部である。

「国立山口大学設立申請書」に記された学部設置構想



8月 県の厳しい財政事情

国は、昭和24年度中の公立専門学校を国立大学移管は認めないという基本方針であったが、交渉の結果、山口獣医畜産専門学校は国立に移管し、農学、林学、獣医畜産学を含む1学科を構成する農林学部の設置が認められた。しかし、これには条件があり、国立移管に要する経費と臨時費を、5年間県で負担する場合に限るという厳しいものであった。

このような理由から、県は8月の県議会の追加議題に予算外負担として、約5,000万円の負担を認めるよう要請した。この年の県の予算は、この議題提出時、推定ですでに約2億円の赤字が出ていた。戦後のインフレ状況の中で、税負担は当然重く、ミシンの所有者にかかるミシン税、ラジオ所有者にかかるラジオ税といった臨時課税まで行われている。

また、この年に県が大学設置運動のために組んだ予算は約500万円、さらに10月定例県議会では、6校5学部の転換費は総額2億円を超え、県から4年で拠出することが明らかとなった。

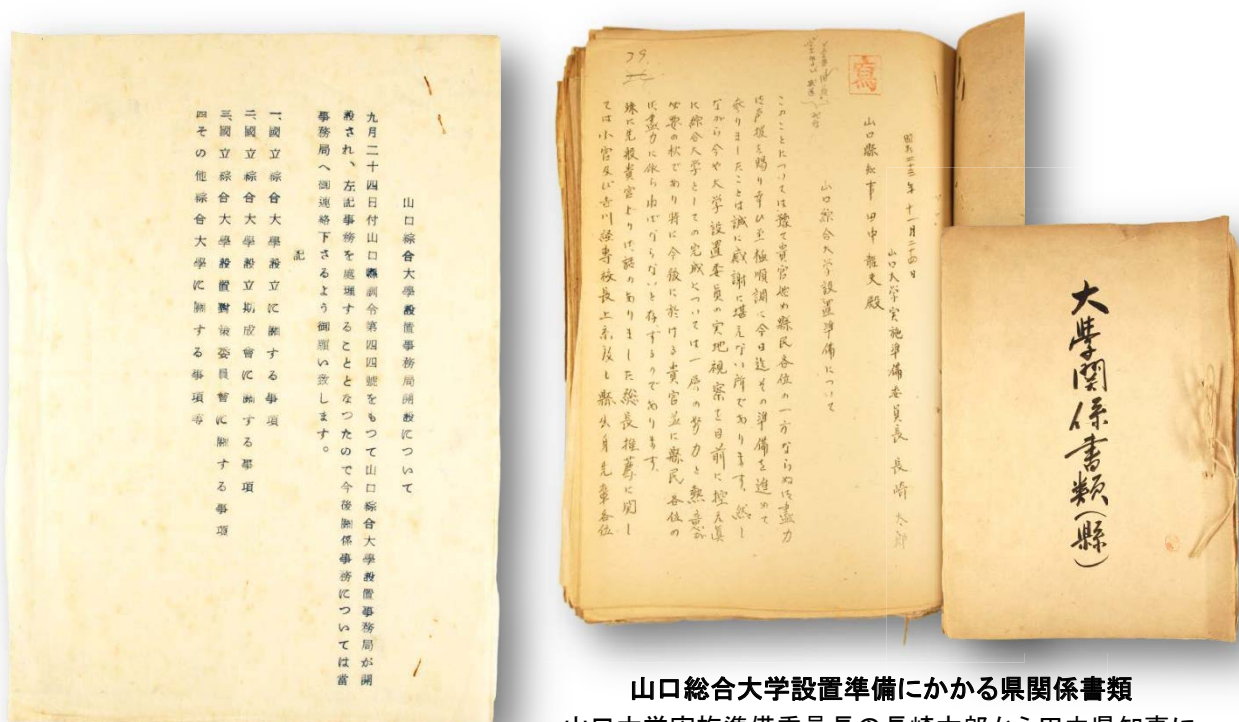
9月 山口総合大学設置事務局の発足

24日、関係市・県・学校の設置運動の調整機関に私的に設けられていた、山口総合設置事務局が、山口県の官制として正式に発足した。(P.53に「防長新聞」記事有)

10月 山口大学実施準備委員会の発足

1日、文部省は旧山高校長の長崎太郎に新制大学創設事務責任者として、文部省、大学設置委員会との折衝、連絡を担当するよう依頼した。これにより、人事处理的事務、文部省との折衝は各校とも長崎をとおして統一的行われるようになった。

26日には、長崎委員長、高専各校長、山口総合大学設置事務局長らからなる、山口大学実施準備委員会が発足した。



山口総合大学設置事務局開設の通知

山口総合大学設置準備にかかる県関係書類

山口大学実施準備委員長の長崎太郎から田中県知事に宛てた文書。大学設置委員会の調査を控え、大学本部施設の決定や、官舎の確保を至急依頼したい旨が書かれている。(昭和23年11月24日)

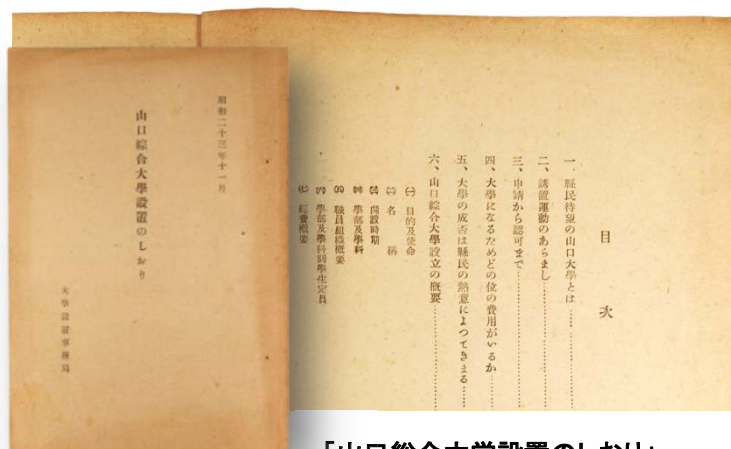
11月 県民へ多額の寄附要請

建物や付帯施設、設立事務費、育英会費、図書費へ5,000万円が必要と計算された。県はこれを財政負担でなく、県民や県出身者、関係企業等の寄附によって集めることとした。必要経費はこれだけでなく、旧山高同窓会、師範学校同窓会、鳳陽会(山口経専同窓会)から約1,000万円の寄附を予定しており、これを文理、教育、経済の校地拡張、施設新設、改修、図書購入等にあてることとしている。

大学設置事務局は、県民から寄附を集めるため、「山口総合大学設置のしおり」という宣伝パンフレットを作成した。募金は郡市別に目標額が設定され、山口市民は県内で最も高額で、1戸平均490円23銭を求められた。食べることに困っている県民に実質上の強制割り当てに近い寄附要請を行うため、当然抵抗感は強く、募金は難航した。翌年5月10日時点で、全く寄附納入のない市、郡が12もあったが、以後、県内および県外関係者、関係機関の寄附を受けることによって、なんとか財源が確保されていった。

	目標総額(円) 県全体 5,000 万	1戸平均(円.銭) 県平均 155.11	1人当り(円.銭) 県平均 33.33
下関	6,777,411	171.03	36.39
宇部	5,342,516	210.57	44.80
山口	9,929,710	490.23	104.30
防府	2,861,949	189.72	40.36
光	1,803,896	224.86	47.84

山口総合大学資金募集郡市別目標額(抜粋)
(『山口大学三十年史』より)



「山口総合大学設置のしおり」

「教育こそ、日本復興の基盤をなすものであり、山口大学の設置は、明日の山口県に光明を与えるものである。」ことを真剣に考え、百五十万県民の皆様と共に、是非、総合大学設置の悲願を、達成したいと思います。」と県民に呼びかけた。

所要経費総額	3 億 9483 万円
県負担額	1 億 1043 万円
一般寄附額	2 億 740 万円
地元公有施設 寄附見積	7700 万円

山口総合大学設立期成会
寄附金経理状況
(『山口大学三十年史』より)

昭和 24 年

1949

1月 大学設置委員会による現地調査

大学設置委員会12名が来山し、3日に県、学校側との懇談、4日に山口経専、旧山高、山口師範、5日に山口青年師範、山口女専、6日に宇部工専、7日に山口獣医専、水産講習所の現地調査が行われた。

山口総合大学設置事務局の計画によると、12月31日に湯田温泉歓迎会、2日間の休養の間に秋芳洞へ、帰りにはお土産を渡すなど、総予算50万円で手厚く歓迎した。調査の結果、認可の方向に順調な進行を見せているが、農林学部は教授が不足しており、設備も不備不完全であるとして、2月9日に再調査を受けることとなった。

3月 教授陣の不足

大学設置委員会では、大学基準協会が22年に採択した大学基準をそのまま新制大学の設置認可の基準として採用しており、その中で、教授の条件を以下のように定めている。

- イ、学位を有する者
- ロ、研究業績のある者
- ハ、高等専門学校以上の学校で3年以上教員の経験があり教授上、学問上の実績がある者
- ニ、学術、技能に秀で教育に経験のある者

この条件を満たすことのできた者は少なかった。さらに、県が提出した教授定員数と文部省案との間にはあまりにも差があるばかりでなく、不足人員を助教授と講師で補充するという県の考え方に対し、文部省としてはこのままの陣容では認可できないと通告した。

文部省としては、ともかく一府県一大学、特に教員確保のために教育系大学または学部は不可欠であるため、著書論文などの研究業績を重要視するのではなく、特に上記条件のハ、にあたる部分は柔軟に評価するよう求めた。ところが、山口県での人選は、研究上の業績や学歴を最重視しており、教授数の少なさも、大学の真価を保持する過渡的現象として免れないとしている。このような状況から、文部省は再三、再審査の書類提出を要求し、なんとか人材を確保しようとしたが、状況は変わらず、教員不足のまま開学を迎えることとなった。

	文部省案	山口県の予定人数
文理学部	29	9
教育学部	22	6
経済学部	15	6
工学部	19	10
農林学部	21	10

教員定数案



「教員個人調査」

大学の設置申請に必要な審査書類として教員予定者の審査書類が綴られている。

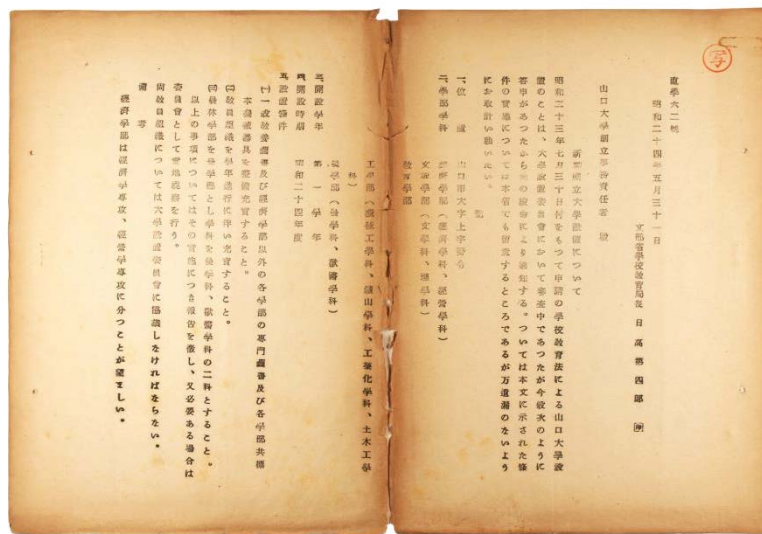
山口大学誕生

創立決定！

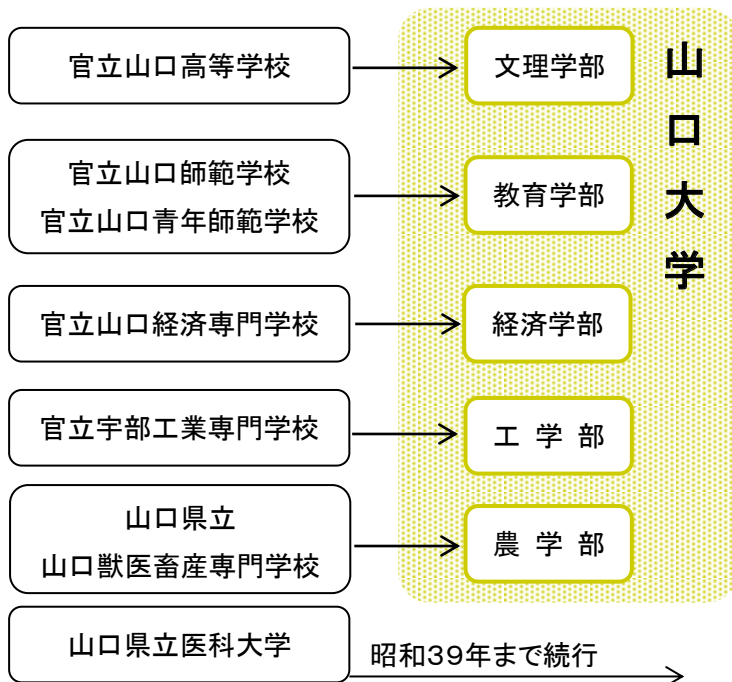
文部大臣の諮問機関である大学設置委員会より審査の正式結果が報告されたのは、昭和24(1949)年5月31日だった。この日、山口大学の設置を含む国立学校設置法が国会を通過し、文部省は省令第23号国立学校設置法施行規則を6月22日付で定め、同日から適用することとした。

条件付きではあったが、山口県の総力を挙げての新制大学設置運動はついに結実し、全国国立大学69校のうちの1校として発足したのである。

本部は経済学部には置かれた。新しく「山口大学」の門標が掲げられた亀山校舎の石門は、山口明倫館、山口高等中学校、山口高等学校、山口高等商業学校、山口経済専門学校を経て、新たな歴史を刻むこととなった。



文部省学校教育局長からの通知「直学62号」



旧高专校から学部への移行図



門標も「山口大学」へ
 (「防長新聞」昭和24年6月2日より)

新制大学スタート

実質的な大学のスタートは6月1日である。学生定員は文理学部105、教育学部160、経済学部160、工学部120、農学部60の計605名で、初代学長には京都大学名誉教授松山基範が着任した。

新制大学の使命は新しい時代を担うにふさわしい教養の豊かな視野の広い日本人を育成することだった。本学の目的及び教育方針には以下のように銘記されている。

広く教養的知識を授けると共に深く文学、理学、教育学、経済学及び工学、農学に関する精深な学術を教授研究して知的道徳的及び応用的能力ある有為の人物を養成し、以て学術の進歩をはかり文化の進展に貢献することを目的とする。

最初の入学試験は、6月8日から経済学部及び工学部が、次いで文理学部・教育学部・農学部が実施した。開学当時、学生は1学年のみ、専任教授は17名に過ぎなかったため、教授会や評議会も存在しなかった。従って、大学の運営制度が整うまでの暫定的機関として、委員長を学長とし、各学部長及び各学部教授2名から構成する山口大学運営委員会（後の評議会）を置くこととなり、その性格を学長の諮問機関と位置付けた。第1回大学運営委員会は6月14日に開催され、第1次合格者発表や2次募集等の日程のほか、入学式は7月15日に挙行すること、授業は8月22日から開始することを決定した。



第1回入学式(昭和24年7月15日)
澆刺とした女子学生が印象的

第1回入学式

大学運営委員会の方針に従って、7月15日午前11時から経済学部講堂において第1回入学式が挙行された。

松山学長は、「真理を探究し、これを応用して社会に貢献する基礎を培うとともに、人格修養の場とされたい。これがためには徒に誘惑に乗らず、盲従すること無く正当な批判眼を養うよう勉学せよ、学校行政は学長その他の合法的に認められた人々が行うべきで、学生の自由なる活動も自らある範囲を超えないようにされたい。」と訓示した。



第1回入学式で告辞を述べる松山学長

開学式

開学式は、昭和24(1949)年11月5日午前10時半から経済学部講堂において、教職員約250名、来賓198名が参加して盛大に挙行された。「松山基範学長の式辞に次いで、文部大臣、ガッサー山口民事部隊長、田中県知事、山下山口市長、受田衆議院議員らの祝辞があり、最後に学生代表の言葉に答えて松山学長は学生代表を抱擁して、“君らが一番大事だ”と慈父の如き冷厳のうちにも包み切れぬ感激を吐露した、終わって吉川経済学部長の記念講演があり、午後1時半閉式した」と防長新聞は伝えている。

ちなみに、この栄誉ある学生代表は、後に本学名誉教授となった堂面春雄氏である。



開学式当日の山口大学



田中龍夫県知事の祝辞



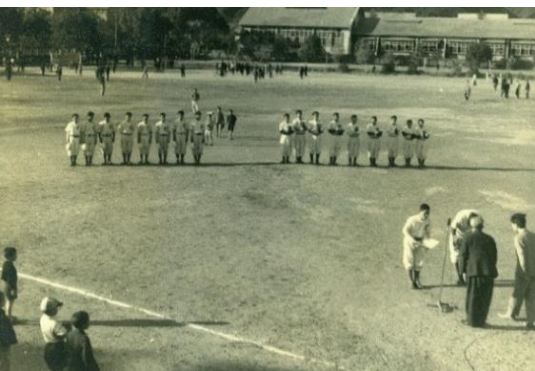
記念祝賀会の様子

また、開学式の前後には運動会や音楽会、対抗野球試合など盛り沢山の行事が開催され、設立に奔走された方々や多額の寄附をいただいた県民各位へ感謝の意が表された。なお、開学記念行事は翌年以降も6月と11月の年2回行われていたが、6月1日は創立記念日と定められ、後に11月にまとめて大学祭が開催されるようになり、現在に至っている。



(上・左)
開学記念運動会

(下)
開学記念野球大会
(対福岡商大)



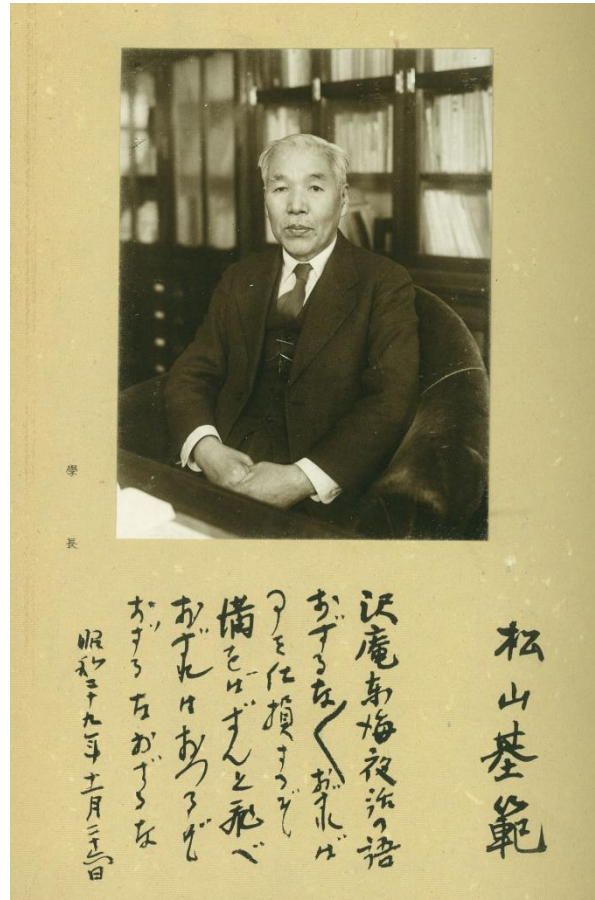
初代学長 松山基範

草創期の礎を築く

開学当時は、戦後の窮乏の中でインフレーションが進行し、庶民生活は苦境に喘ぎ、学生生活も著しい風波に曝された時代だった。学園では各母体の高専校から発足した各学部が、体裁を整えるために辛苦を重ねた時期である。

このような時期に着任した松山基範学長は、大分県出身で11歳～18歳までを山口県豊浦郡清末村高林寺(現下関市)で過ごした。京都帝国大学に入学し京都大学名誉教授となった後、65歳で本学学長に就任した。

昭和33(1958)年1月に現職で逝去するまでの8年8ヶ月の間、文理学部校舎の新築移転、教育学部分校の統合、工業短期大学部創設、経済学部専攻科及び商業教員養成課程設置などを整備するとともに、評議会や協議会を発足させ、学長選考規程、教授会規定など諸規則を制定し、草創期の本学の基礎を築いた。



松山基範学長

(昭和30年経済学部卒業アルバムより)

沢庵和尚の言葉を引いて、「おずるな(おそれるな)」と若者たちを鼓舞している。

世界的な地球物理学者

松山学長は著名な地球物理学者でもある。京都帝国大学教授在任中に、時代の変遷に伴い磁場が何度も逆転したという「地球の磁場逆転現象」の学説を昭和4年に世界で初めて提唱した。この論は当初、全く注目されなかったが、1960年代に入って世界的に認められるようになり、これにより、250万年から70万年前までの磁極逆転期は「松山逆磁極期」と名付けられている。

また、1930年代には測地学の分野でも、朝鮮・満洲・台湾・南洋諸島・日本近海の重力測定という業績を残し、特に日本海溝での負の重力異常発見は当時の国際学会で高く評価された。

山口への地域貢献

松山学長は、初代学長として学内の整備を行う一方、学者としての知識や趣味を活かして、精力的に地域社会へ貢献した。

学術調査団

「新設の国立大学は、学問の研究と学生の指導が使命であるが、地域社会の文化・学術・産業の振興にも寄与すべき責務があり、そうしてこそ大学への支援も得られる」との認識から、山口県と連携して長門日本海岸、佐波川、見島、島田川遺跡、秋吉台等で学術調査を行った。



秋吉台

特に秋吉台を米軍の空爆演習場に使用したいとの要請があった際(昭和31年)、学術調査団長として秋吉台の学術的価値を示すことで演習や計画を取り止めさせ、自然を保護したエピソードは有名である。

ユネスコ活動

社会的活動のうち、最も熱心だったのはユネスコ活動だった。学長就任直後の昭和24年に山口市ユネスコ協会初代会長、昭和26年には山口県ユネスコ協会連盟初代会長を務め、学長室で理事会などが開催された記録から、松山学長がユネスコ活動の中心的存在だったことが伺われる。

謡曲 (宝生流)

謡曲を生涯唯一の趣味とし、「いまおはじめ今尾始」の別名で能楽界でも有名だった松山学長は、山口宝生会会長として、大学や地域で謡曲を指導し、文化の発展にも貢献した。

顕彰碑

松山学長が少年期を過ごした下関市赤池町の高林寺境内に、松山基範先生を顕彰する会により顕彰碑が建立され、平成21(2009)年1月25日に除幕式が行われた。

碑は御影石で作られた地球をモチーフにした半円形で、表には本学卒業生で直木賞作家・古川薫氏による「地球を愛し、ふるさとを愛し、人間をこよなく愛したせきかく碩学」という一節が刻まれている。



松山基範先生顕彰碑

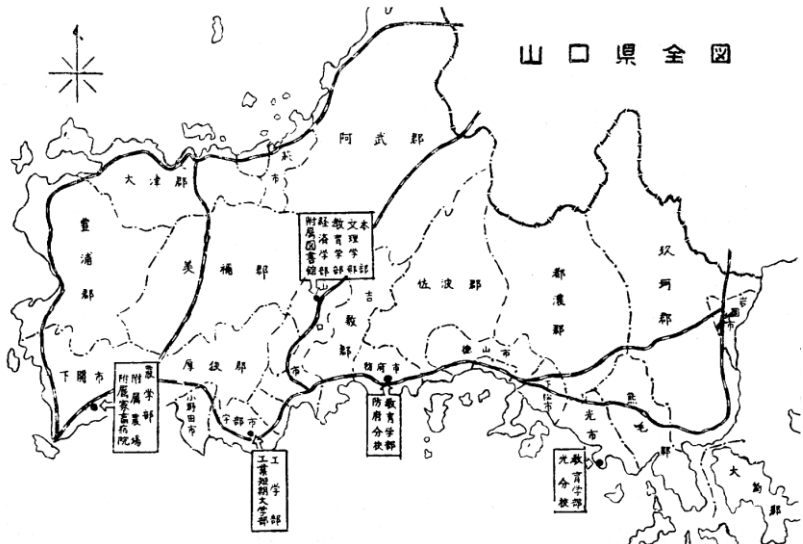
大学の運営

分散していた学部

開学当時、工学部は宇部市、農学部は下関市、教育学部は山口市に本校、光市と防府市にそれぞれ分校があり、山口市においても文理学部は糸米にあって、経済学部、教育学部とはかなり離れていた。

このような状態にあって、先ず施設の整備・統合の課題があったが、一応総合大学としての形態を整え、昭和28(1953)年3月28日には経済学部講堂において第1回卒業式が挙行された。

同年6月、山口大学本部が経済学部校舎から新道(現在の市民会館敷地)に移転し、このころから大学の管理・運営の整備も始まった。従来の大学運営委員会に代わって評議会、協議会が発足し、学長選考規程や教授会規程などが制定された。



昭和28年頃の学部等配置図

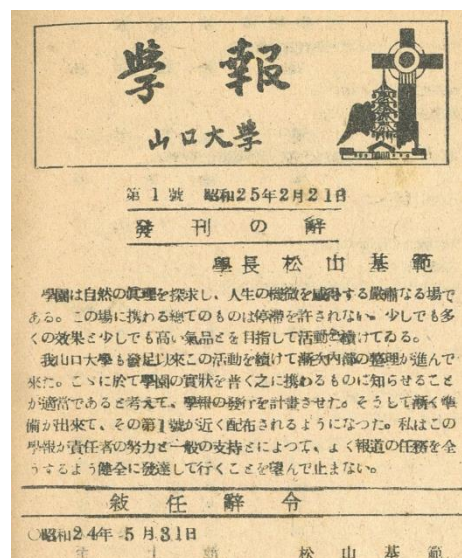
(昭和30年度『山口大学要覧』より)

山口大学学報の創刊

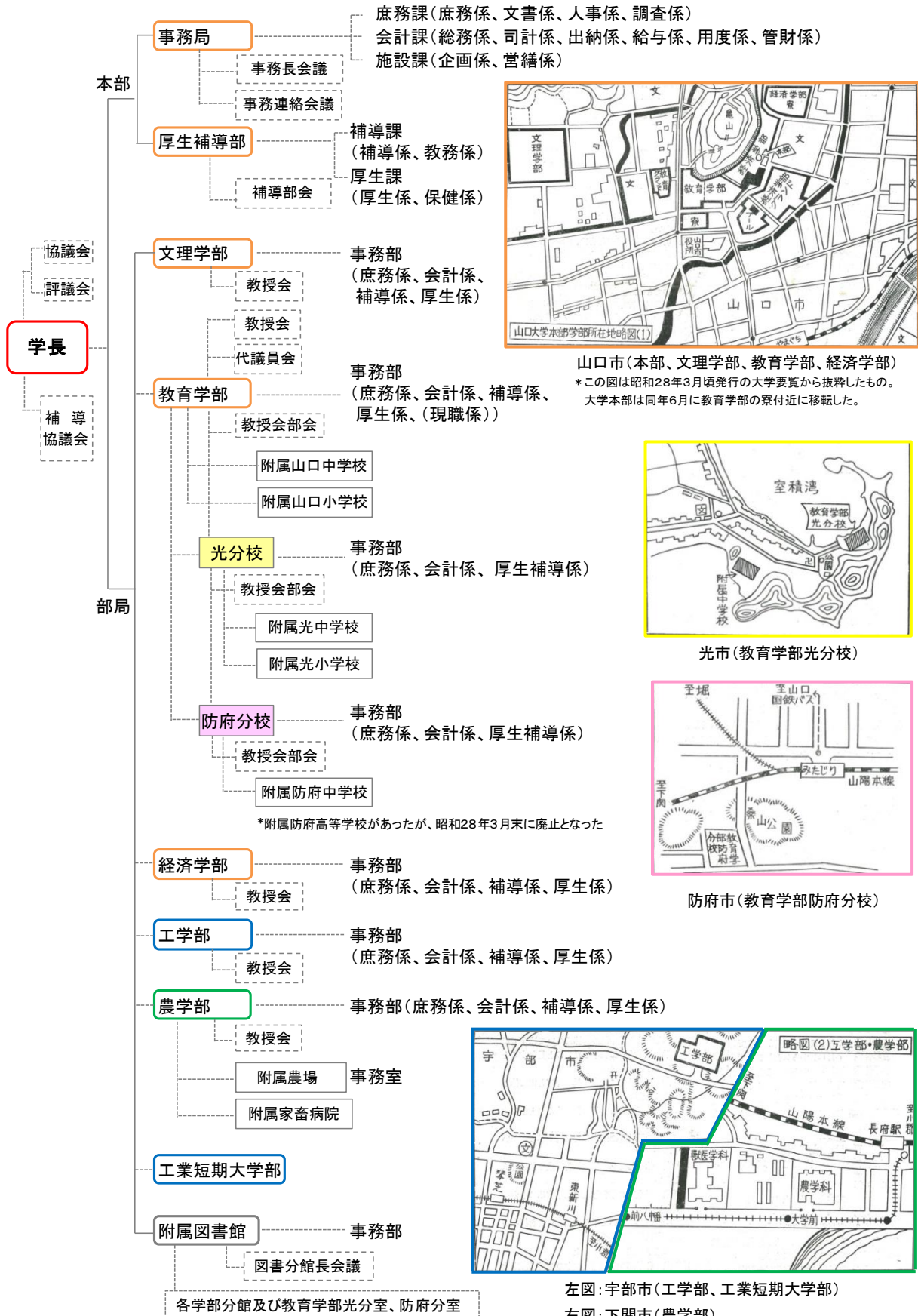
昭和25年、学報が創刊された。発刊の辞で松山学長は、「学園は自然の真理を探求し、人生の機微を感得する厳肅なる場である。この場に携わる総てのものは停滞を許されない。」と述べている。

「この学報が責任者の努力と一般の支持によって、よく報道の任務を全うするよう健全に発達して行くことを望んで止まない。」との松山学長の言葉のとおり、学報は現在も毎月発刊され、本学の現状を報せるとともに、たゆまぬ活動を記録し続けている。

山口大学学報第1号



運営組織機構図 (昭和28年10月1日時点)



草創期の各部局

文理学部

学生定員 105 名（文学科 65 名、理学科 40 名）

官立山口高等学校（旧山高）を母体として山口市糸米（現在の県立山口高等学校の敷地）に誕生した。その後、文理、経済、教育の3学部を山口市の中央地区に集めるため、後河原の新制山口高等学校東校舎跡に昭和29（1954）年10月に校舎を新築し、移転した。



糸米時代の文理学部講堂（昭和24年頃）

なお、教養部が設立される昭和41年までは、文理学部が全学の一般教養課程を担当し、その授業は文理学部、教育学部、経済学部の教官によって行われた。



後河原に移転後の文理学部校舎全景

教育学部

学生定員

4年課程 160 名

第1中等教育科 80 名（山口 50、防府 30）

第1初等教育科 80 名（山口 80）

2年課程 400 名・・・後に廃止

第2中等教育科 200 名（山口 60、光 80、防府 60）

第2初等教育科 200 名（山口 80、光 120）



教育学部正門

官立山口師範学校と官立山口青年師範学校本校を母体として、山口市に本校を、光市及び防府市に分校を置き、3か所に分散して発足した。設立当時は生活の困窮という世情を反映して定員割れの状態が続いたが、昭和27年頃から定員を満たすようになった。

また、昭和24年に公布された「教育職員免許法」及び同法施行規則に基づき、戦前の免許を有する現職教員に、上級又は異種の免許状が得られるよう、県主催の免許法認定講習（現職教育講座）が昭和25年から本学において行われ、教育学部が中心となって授業を受け持った。ちなみに、昭和26年の実績は講座数120、受講生3,701名だった。

経済学部

学生定員 160 名（経済学科 80 名、経営学科 80 名）

国立山口経済専門学校（山口経専）を母体として誕生した。山口高等商業学校時代から引き継がれた伝統を基に、早くから大学院設置の全国運動を展開した。結果として大学院構想は結実しなかったが、昭和29年に経済学専攻科及び商業教員養成課程が開設された。



併設された門標



経済学部校舎全景



算盤の授業

工学部

学生定員 120 名

（機械工学科 40 名、鉱山学科 25 名、
工業化学科 30 名、土木工学科 25 名）

国立宇部工業専門学校（宇部工専）を母体とし、4学科でスタートした。新入生は山口市で一般教養課程を修め、第2学年後期以降は宇部市において専門課程を履修した。

戦後の経済発展の基盤として、工業立国の必要性が叫ばれた時勢に乗り、昭和28年に工業短期大学部が併設されたのを皮切りに、昭和30年代以降次第に整備拡充されていった。

（上）工学部本館前庭

（下）河山本杭実習



農学部

学生定員60名(農学科30名、獣医学科30名)

母体である山口県立山口獣医畜産専門学校(山口獣医専)が、開学前年の昭和23(1948)年12月に吉敷郡小郡町から下関市長府町へ移転していた。そのため、新入生は工学部と同様に山口市で一般教養課程を修め、翌年の秋から下関市の農学部校舎で専門課程を履修した。

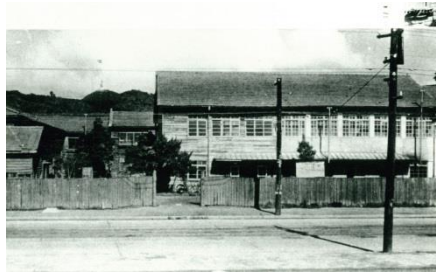
附属農場は清末農場の他に乃木浜農場と才川農場が新設され、実験結果を基に干拓地における水稻栽培に貢献した。また、附属家畜病院は昭和28年に官制化され、昭和30年には下関市中之町に分室が設置された。



長府時代の農学部校舎前景



附属乃木浜農場



獣医学科校舎



実習

本部・図書館

開学に伴い、国立学校設置法施行規則第5条により事務局及び厚生補導に関する部が設置され、庶務課、会計課、施設課、補導課及び厚生課が置かれた。発足当時の本部は経済学部構内(山口市亀山)にあったが、昭和28(1953)年に教育学部の寮を改造した山口市新道の庁舎に移転した。

また、図書館は国立学校設置法第6条により附属図書館として設置されたが、本館は文理学部に間借りしており(昭和26年に経済学部に移転)各分館・分室は旧制高校・専門学校の図書館をそのまま引継いだ。

昭和24年10月現在の全学教職員数は、教官282名、事務職員346名で合計628名だった。



発足当時の本部(経済学部構内)



山口市新道に移転後の本部

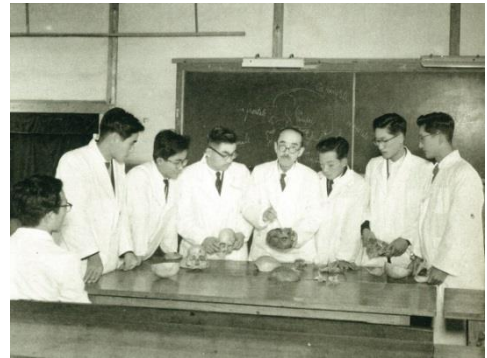
独自の道を選んだ医学部

山口大学が開学した頃、医学部の前身校である山口県立医科大学においては、戦後の医専存続問題から脱して大学への昇格が認められ、昭和24(1949)年5月7日に附属病院の落成式と併せて盛大な開学式を挙行了たばかりだった。

その後、昭和26年に山口県立医科大学(旧制)を新制大学として認可申請した際、文部省は国立への移管を強く要望した。当時、戦時中に開校された医専で、戦後A級指定を受け、廃校を免れ、医大(旧制)に昇格したものが全国に数校あり、文部省はそれらを国立移管する方針で、それぞれの所在地の国立新制大学に統合するよう指導していたのである。

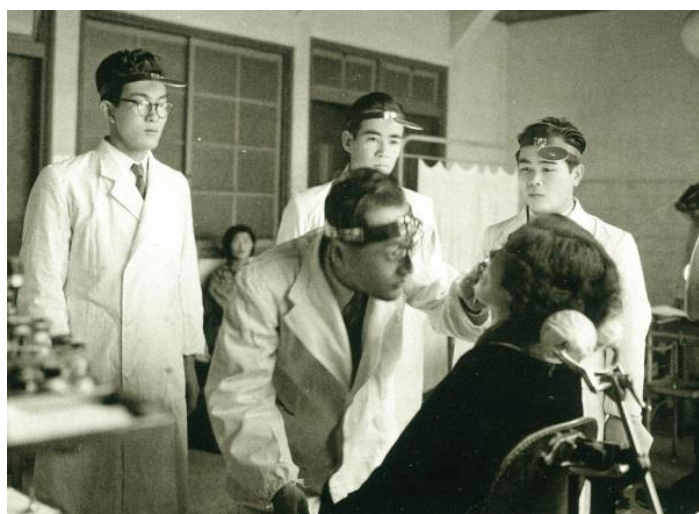
しかし、当時は大学の自主性が尊重されたので、どの途をとるかは度々開かれた教授会で検討された結果、このまま県立医大として進み、国立移管はしない方針が決定された。

昭和27年4月に新制大学として新たなスタートを切った山口県立医科大学は、昭和39年に国立移管されるまで、厳しい財政下にありながらも大学院設置や病棟拡大など、医療の充実に向けて奮闘することとなった。



(上)解剖学実習

(左)開学した頃の山口県立医科大学校舎



(上)病院実習(耳鼻科)

(右上)内科臨床実習

(右下)医科学実習



学生生活

空腹を抱えて勉強

開学当時は、戦後の混乱がようやく鎮静化の方向に向かってはいたものの、まだ生活物資の窮乏は続いていた。特に食料品の不足は著しく、寮の朝食がコッペパン1つと味噌汁に、たくあん2切れという状態だった。開学の前年には、主食の代わりに砂糖が配給になる始末で、砂糖では腹が満たせない、空腹では勉強ができないということで、1週間臨時に休みにした、いわゆる「砂糖休暇」があったほどである。

しかし、1950年代前半の大学・短大進学率は約10%であり、当時の学生は空腹を抱えながらも選ばれて入学したという誇りと自負心をもち、目を輝かせて講義に聞き入った。教室は学生で満員の状態であり、本学学生生活はこのようにして始まった。



昭和29年頃の学生の暮らし

学生の経済状況(昭和24年度『山口大学一覽』より)

○学費

- イ、授業料年額 3,600円(教育学部は免除)
- ロ、納入方法 年2期(4月、11月)
- ハ、特典 貧窮免除 ニ、学友会費 未定
- ホ、受験料 400円 ヘ、入学金 400円
- ト、その他納入すべき金額 学部により特殊の実験実習の実費
- チ、1学年間納入金総額 4,400円

○内職の状況

- イ、各学部補導厚生係に於いて多少の斡旋をしている8月末までの状況は、
求職人員185名 求人数165名 斡旋人数163名
- ロ、最も多い職種名 A 事務(会社方面) B 重労働(土建方面)
- ハ、日収の状況 最高250円ー最低150円 平均200円
- ニ、備考 工学部附近は内職相当あるもその他は少し

○生活費1ヶ月必要額

- A 自宅通学生 2,000円 B 寄宿舍生 3,000円
- C 下宿生 3,500円

○身上相談又は生活相談施設 厚生補導部関係に

- において担当している。主な相談事項は、
- 1. 学費の問題 2. 内職の問題 3. 家庭の事情等



課外活動の全学組織化

開学当初、課外活動は前身校がそれぞれ独自に行っていた形態を受け継ぎ、しばらくは学部ごとに続けていたが、昭和27(1952)年度までには、経済学部、教育学部とその分校、文科系一般教養学生の自治会が誕生した。全学的サークルとしても、文化部に文芸、弁論、映画(わかば会、エスポワール)、宗教、英語、音楽、新聞、社会科学研究、写真、演劇の各部ができ、また運動部に山岳、卓球、ラグビー、サッカー、テニス、野球、陸上競技、バレーボール、バスケットボールの各部ができた。

昭和26年に山口大学主管で中国五大学学生競技大会が開催されることになり、体育会設立の動きが生じた。「ひろく全学的な組織を作り、一般学生を包含した土壌の広くて深い組織が必要」と、学生中心に約3千人が署名活動を行い、昭和28年4月に運動部の全学的組織として体育会が結成された。一般体育愛好者に運動用具貸出の便宜を図るとともに、それぞれの運動部が相互に連絡をとりあいながら全運動部の発展を目指すこととなった。



山口大学体育会旗



体育会発足時の総務(昭和28年4月)
中央は松山学長

中国五大学学生競技大会

終戦後の学生に希望を与えようと新制大学誕生の翌年、昭和25年に大会が発足した。「中国地方における学生体育運動競技の健全なる普及及び発達を期し、併せて相互の親睦を図る」との理念のもと、第1回目は大会を提唱した広島大学主管で開催された。第2回大会は、運動・宿泊施設のまとまっていた山口に決まり、以降、岡山・島根・鳥取の順で主管を持ち回ることとなった。



最近の中国五大学学生競技大会壮行式

開催回		第1回	第2回	第3回	
開催年		S25	S26	S27	
主管大学		広島	山口	岡山	
夏季	バレーボール	男	山口	山口	広島
		女	広島	島根	広島
	軟式庭球	男	広島	広島	山口
		女	広島	広島	岡山
	水泳		広島	岡山	岡山
	卓球	男	岡山	広島	広島
		女	鳥取	岡山	山口
	陸上競技		岡山	広島	広島
	体操		岡山	岡山	岡山
	軟式野球			広島	広島
	バドミントン		鳥取	広島	広島
	柔道(準)		岡山	岡山	岡山
冬季	バスケットボール	男	鳥取	鳥取	鳥取
	ラグビー		山口	山口	岡山
	サッカー		岡山	広島	広島

第1回～第3回の結果
※順位は1位のみ記載

学生寮

開学当時の学生寮は、ほとんど前身校から引き継いだもので、山口地区4、宇部地区1、下関地区1、防府地区2、光地区1の合計9寮があった。

開学当時の学生寮(昭和24年度『山口大学一覽』より)

名称	所在地	収容人数			1ヶ月経費 (食費を含む)
		男	女	計	
文理学部 鴻南寮	山口市糸米	120	-	120	1,640 円
教育学部 時雍寮	山口市芳沢町	114	-	114	1,240 円
〃 桑山寮・桑陽寮	防府市桑山	150	60	210	950 円
〃 御手洗寮	光市室積	10	50	60	950 円
〃 香山寮(後の女子寮)	山口市香山町	-	17	17	1,240 円
経済学部 鳳陽寮	山口市亀山	150	-	150	1,400 円
工 学 部 常盤寮	宇部市常盤台	120	-	120	1,200 円
農 学 部 興陽寮(後の松原寮)	下関市長府	30	-	30	不明

* 農学部寮の収容人数は松原寮を掲載



鳳陽寮



常盤寮



飯盒を囲んで...



囲碁を楽しむ学生



休日には洗濯を



時雍寮

学生歌

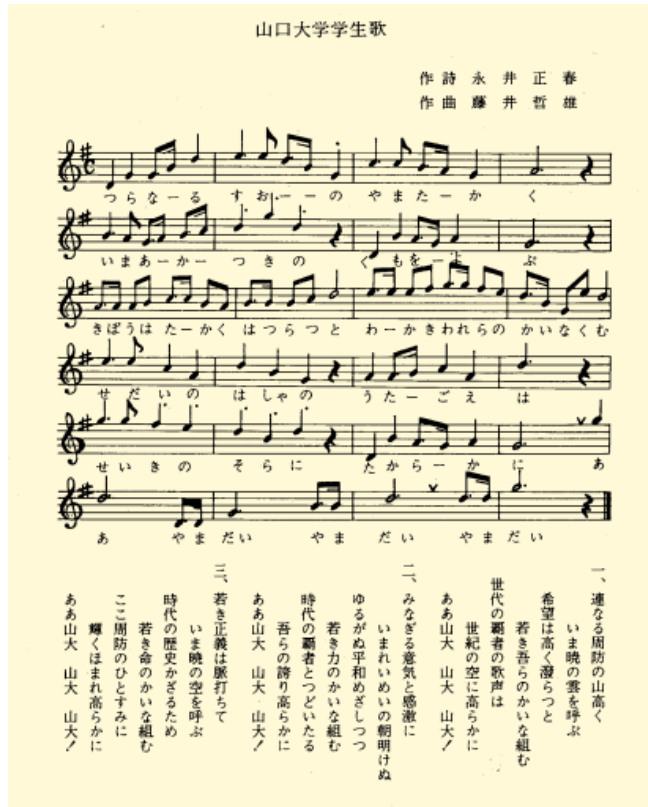
現在、入学式や卒業式の際に山口大学混声合唱団が歌う山口大学学生歌は、開学記念行事の一環として昭和26(1951)年6月に、本学学生と教職員を対象に募集が行われ、応募総数22点の中から、当時会計課職員だった永井正春氏の作品が選ばれたものである。

学生たち自治会役員はこれを喜び、当時教育学部の学生で作曲の才能を認められていた藤井哲雄氏に作曲を依頼し、昭和27年に完成した。

なお、同時に募集した山口大学標章(バッジ)は、優秀な作品が得られず、標章の制定はもう少し後の、山口大学創立三十周年記念行事(昭和54年)まで待つことになる。

山口大学学生歌

作詩 永井正春
作曲 藤井哲雄



つらなる すおの やまたか く
いまあーかー つきの くもぶ
きぼうは たかく はつらつと わーかきわれらの かいなくむ
せだいの はしゃの うたーごえ は
せいきの そらに たからーか に あ
あ やまだい やま だい やまだい

一、連なる周防の山高く
いま暁の雲を呼ぶ
希望は高く澄らつと
若き吾らのかいたを組む
世代の覇者の歌声は
世紀の空に高らかに
ああ山大 山大 山大

二、みなぎる意気と感激に
いまれいめいの朝明けぬ
ゆるがぬ平和めざしつづ
若き力のかいたを組む
時代の覇者となつたる
吾らの誇り高らかに
ああ山大 山大 山大

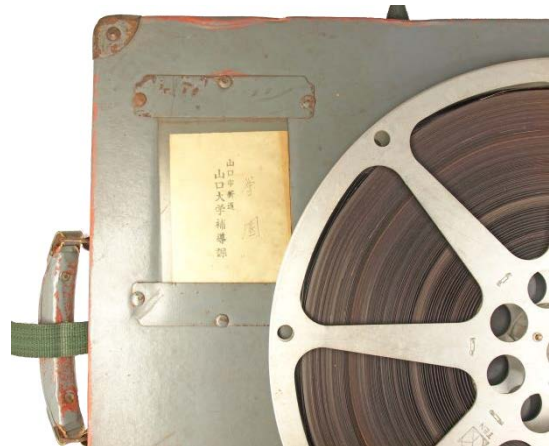
三、若き正義は旗打ちて
いま暁の空を呼ぶ
時代の歴史をかざるため
若き命のかいたを組む
こゝ周防のひとすみに
輝くはまれ高らかに
ああ山大 山大 山大

映画「学園」の製作

昭和32年、学生生活の1年を描いた劇映画「学園」が製作された。当時の西日本地区の大学では珍しいもので、脚本、監督、俳優は全部学生達だった。内容は、学内の諸行事と勉学を背景に、男女学生間のロマンスも織り交ぜ、若人の交錯する哀歓を巧みなタッチで山大生活のニュアンスを十分に浮彫りにしつつ、若い健康な青春像を高らかに歌い上げており、随所に五重塔やザビエル教会、雪舟庭など観光名所も盛り込まれている。

撮影機は昭和31年夏に学生部が米国のベル会社から買い入れた最新鋭16ミリで、翌年4月にクランクインし12月撮影終了。写したフィルムは1,200フィート、映写時間は40分である。製作にあたっては、各学部自治会、サークル、教職員による映画製作委員会を作り、脚本を募集し、俳優は全学生から委員会のイメージに合う者を選抜した。当選した脚本は吉富久人氏(教育学部4年)と寺下英明氏(経済学部4年)の合作だった。

なお、この映画「学園」は、平成20(2008)年に本学において半世紀ぶりに復刻されている。



12.13

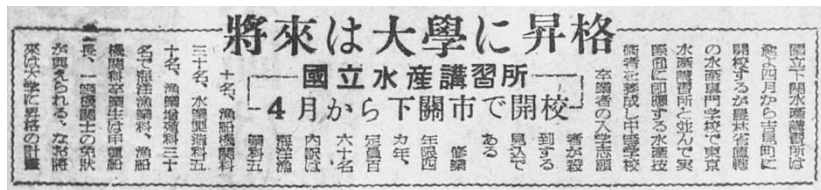
宇部市、山口医専の大学昇格目指し全市を挙げて運動



昭和 22 年

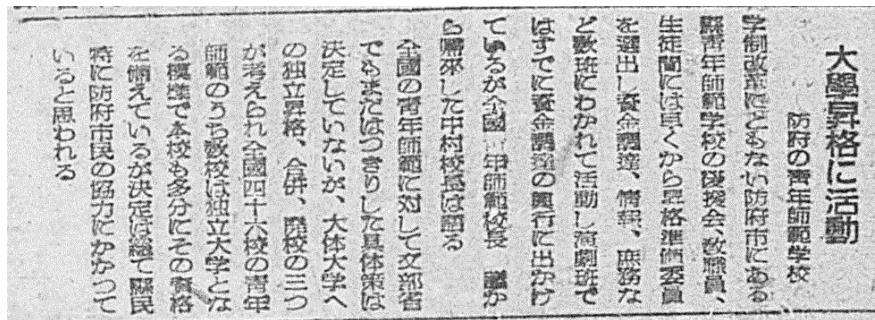


2.1



2.9

2.17



6.28

県内各市で動き

光市、下関市、防府市でも大学設置を目指して運動が繰り広げられ、県内各地で機運高まる



6.1

総合大学の實現へ 第一回 協議会

問題は資金の獲得

取敢ず師範単科大学？

願民多年の要望である防長総合大校長はか市内高専校長ならびに中
 学設立運動の一段階として、山口 高等学校長、縣信から熊本教育部長
 市では關係方面の意見を聴取して、熊野視学官これに縣会から河村
 急速に實現を期すため、七 縣外三縣議が加わり二十名
 日午前九時三十分から山口市益廣 出席、まず山市長から各高専校
 屬に市内各高専校長ならびに關係 合併による総合大学の設立光市女
 者を招いて高専学校、専門学校協 子師範の山口市移轉とともに師範
 議會を開いた、出席者は熊野視學 校を單科大学に、また小郡農業校
 を高等専門校に昇格することによ
 つて学都山口の強力な發展に資し
 たい旨の意向を表明し、使各出席
 者から活潑な意見を聞取した結果
 早速に設立運動の準備に着手す
 ることに意見一致、なかには直ちに
 準備委員会結成の意進説も出たが
 關係地区学部、防府市を招へい

する必要上次回協議会に懸望する
 ことになって十一時三十分閉会し
 たが、同協議会の主なる意見は次
 の通り、

【熊野山口経専校長】先日全國高
 専校長會議に出席した際、本省黨
 局へ山口は総合大学設立の可能性
 ありや否やについて尋ねた時各学
 部の連絡が二、三十分以内につく
 場合ならよからうと意向をもち
 ていたこの点については防長綜
 合大学は可能であるが問題は財政
 をどうするかである、設立は單純
 に實現できないとしても中央の関
 係當局は近く設立委員会を設置す
 るまでに進んでいる模様であるか

ら地元でも一刻も早く防長大学設
 立の準備をした方がよい

【井上山口師範校長】私は現代の
 高専校は一顧、一ように大学に
 昇格された方がいいと思う、そ
 して学校経営して行くうちに
 成職の悪い学校は自然的に閉鎖
 さすか、合併さす方が問題が少
 くてよいと思う、室積女子師範
 の山口移轉は是非、実現したい
 女子部が室積にあるために、入
 学應募者が一地区にかたまつた
 り、教員配置で本省との接衝や
 経済的に不便を感じることもが
 多い

【橋本縣教育部長】新大学の
 実施に伴つて各縣とも大学設立運
 動の準備を進めている、私は総合
 大学設立をかける場合量に多く
 の高専校があるから総合大学をつ
 くるというふうに考えてはいけな
 いと思う、文化の地域的きん磨
 價問題、教育面からみた歴史、傳統
 など各方面から考えるべきだと思
 う、幸い本縣は地理的にも中國、
 朝鮮との關係がふかくなるばかり
 でなく学都としても適していると思
 う、財政問題や、中央の方針もあ
 るから設立準備は各方面の意見を

聞いて早く進める方がよい

【山下山口市長】山口師範女子部
 の山口移轉はさきの際合でも決
 議済みであるから急速にやりた
 い、校舎は現在の附屬校にあて
 附屬校は白石小学校に移す考え
 だ、総合大学は官立にしたい、
 総合大学にする場合、学部一山
 口間の連絡強化のため市営バス
 阿知須線を学部まで延長するこ
 とや小郡獣医校や女專校の経費
 で負担するぐらいの覚悟が必要
 だと思ふ、山口市は立地條件も
 よく中央には郷土先輩も多くお
 り關係方面の意見を聞いて急速
 に準備を進めたい、次回協議会
 には学部、防府地区の關係者も
 お招きして設立委員会として
 相懸る

協議会以下十五名の設立調査委
 員を選定した

山口経専昇格 運動に取掛る

医科をのぞいた各地高専校の大学
 昇格についてはまた本省で昇
 格規程が決定されないため、各
 校とも昇格運動その他の處置に

混迷しているが、山口経専校の卒
 業生である鳳陽会は早く側面
 から同校昇格運動を展開するため
 同会理事長高橋潜藏氏を中心とし
 て同校設備の充実、運動基金募集
 などの準備にとりかかっている昇
 格規程は学校設備、教授内容、実
 績、校風などが勘案され、七月下
 旬ごろ決定される模様である

7.12

8.8 (P. 22 関連記事)

山口市が中心となって各高専校連携のもと、総合大学設立へ踏み出す

防長新聞

發行所
山口市大字上字科42960番地
防長新聞社
電話代番288番
編集印刷部計人 業務正太郎

山口に総合大学有望

二十七日 誘致運動を具体化 委員会同 誘致運動を具体化

新編総合大学は中国地方に設置する方針が定まった。山口県は総合大学誘致に力を入れており、中国、四国、特に山口、愛媛、岡山、広島は自然環境の整った運動を推進する。山口県は総合大学を誘致する校舎設備なく、既設校も同様、条件だけは具備していても、財政的補助がない。この点、本縣は地形的条件で誘導されないが、県、市、町、村では自然条件を整い、誘致に力を入れる。山口県は総合大学の運動の火を切らぬよう、一歩の前進を期している。

山口県は総合大学の運動の火を切らぬよう、一歩の前進を期している。

山口県は総合大学の運動の火を切らぬよう、一歩の前進を期している。

縣も誘致に同調

橋本本縣教育部長談

山口県は総合大学の運動の火を切らぬよう、一歩の前進を期している。

山口県は総合大学の運動の火を切らぬよう、一歩の前進を期している。

山口県は総合大学の運動の火を切らぬよう、一歩の前進を期している。

自由黨下関支部会
支部では、山口県は総合大学の運動の火を切らぬよう、一歩の前進を期している。

12.23

文部省の中国地方に大学1校の方針に、山口県も誘致運動を強化

昭和23年 実現へ向けて進む計画

総合大学構想成る

既設高専諸校を一丸

文部省は、中国地方に総合大学1校を設置する方針を決定した。山口県は、この方針に同調し、誘致運動を強化している。既設の高等専門学校を統合し、総合大学の基盤を整えることが計画されている。

1.10

総合大学の誘致へ

軌道に乗る實現運動

近く陳情團上京

きまつる民主主義 大会開催

新警察制度の組織

山口県は、総合大学の誘致運動を軌道に乗せるため、上京陳情団を組織し、文部省に陳情を行う。また、民主主義大会を開催し、国民の支持を得る。新警察制度の組織も決定されている。

1.20

九學部に大學本部

總合大學専門委員の具體案

三地區から選抜 縣公安委員の下馬評

総合大学の組織として、九學部と大學本部を設けることが決定された。また、三地區から選抜された委員の下馬評も完了している。

1.27

學都山口と総合大学 (上)

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

學都山口と総合大学 (下)

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

大学の住みよい街に 欲しい学生社交機関

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

山口大学は、山口県を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。このため、山口県は、総合大学の設置を目的として、山口大学を学都として整備するに当たり、総合大学の設置が第一である。

1.28・29 県内の高専校長など出席の座談会が開かれ、総合大学について意見が交わされる

山口市で 議決

大学は北山口へ

南山口に縣廳を移轉

三日の山口市議会「これに對應する策を決めるべきだ」は午後三時から協賛会を開いて総合大学設置に關し、南山口に縣廳を移轉については本市議会は深き関心をもち、將來策として北山口は學部、南山口は政治的中心地として發展せしむべく、協賛會の努力を拂うことをこゝに申合せ

2.5 (P. 23 関連記事)

山口市、北山口を学都、南山口を政治的中心地として整備すると申合せ

山口必然性を主張

総合大学に縣當局構想を起草

一、文化の傳統に

山口は古くは日本に於ける中心地であつた。山形、甲府、信州、越前、富山、石川、福井、滋賀、岐阜、愛知、三重、奈良、和歌山、徳島、香川、高松、岡山、広島、山口、長門、豊前、豊後、大分、熊本、鹿児島、沖縄の諸縣の中心地であつた。山口は、この諸縣の中心地であつた。山口は、この諸縣の中心地であつた。

二、教育的環境は

山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。

三、資源産業中國

山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。

四、國際的にも好

山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。

五、学部設置の基

山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。

六、既有学校施設

山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。

七、交通の要衝か

山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。山口は、古くは日本に於ける中心地であつた。

學部設置構想

本部及び学部	現在地
文学部	山口市
法学部	山口市
経済学部	山口市
工学部	山口市
医学部	山口市
農学部	山口市
教育学部	山口市
体育学部	山口市
芸術学部	山口市
国際学部	山口市
環境学部	山口市
情報学部	山口市
看護学部	山口市
歯学部	山口市
薬学部	山口市
獣医学部	山口市
工学部	山口市
農学部	山口市
医学部	山口市
教育学部	山口市
体育学部	山口市
芸術学部	山口市
国際学部	山口市
環境学部	山口市
情報学部	山口市
看護学部	山口市
歯学部	山口市
薬学部	山口市
獣医学部	山口市

各學部に充當すべき既設施設の概要

本部	既設施設	備考
文学部	山口大学文学部	
法学部	山口大学法学部	
経済学部	山口大学経済学部	
工学部	山口大学工学部	
医学部	山口大学医学部	
農学部	山口大学農学部	
教育学部	山口大学教育学部	
体育学部	山口大学体育学部	
芸術学部	山口大学芸術学部	
国際学部	山口大学国際学部	
環境学部	山口大学環境学部	
情報学部	山口大学情報学部	
看護学部	山口大学看護学部	
歯学部	山口大学歯学部	
薬学部	山口大学薬学部	
獣医学部	山口大学獣医学部	

全縣議を委員に 対策委員 会を設立

山口県教育委員会が、山口県全縣議を委員とする「山口県教育振興委員会」を設立した。この委員会は、山口県教育振興の策を立案し、実行するものである。委員会は、山口県教育委員会、山口県全縣議、山口県教育振興委員会の三者で構成される。委員会は、山口県教育振興の策を立案し、実行するものである。委員会は、山口県教育委員会、山口県全縣議、山口県教育振興委員会の三者で構成される。

2.22

山口県、「国立山口大学設立趣意書」を作成し、具体的全体像を示す

農水産両學部も 設置を積極的運動

設置を積極的運動

（東京文部省）山口大学、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

5.23 4学部に農・水産両学部を追加

5.12 総合山口大学誘致東京委員会も積極的に活動

総合大学東京だより

益々有利に展開

山口大学誘致東京委員会、益々有利に展開中。各学部に設置を積極的運動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

山口大学誘致東京委員会、益々有利に展開中。各学部に設置を積極的運動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

総合大学誘致

各方面で活動

山口大学誘致東京委員会、各方面で活動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

山口大学誘致東京委員会、各方面で活動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

6.13 学生らも誘致運動に励む

財政と立地条件

文部当局慎重に審議

山口大学誘致東京委員会、財政と立地条件を文部当局に審議中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

山口大学誘致東京委員会、財政と立地条件を文部当局に審議中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

6.6

総大設 事務局 足

総合大学設置事務局は、山口県内に設置され、設置を積極的運動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

総合大学設置事務局は、山口県内に設置され、設置を積極的運動中。山口大学は、設置を積極的運動中。農水産両學部を設置するべく、各学部に設置を積極的運動中。

9.30 (P. 26関連記事) 総合大学設置事務局を県庁内に設置

明春四月五學部開く

山口・宇部・長府に散設 県民から寄附五千万圓を募集

山口総合大學決定版

山口総合大學の設置は、山口県民の熱望するところである。山口県は、戦後、経済的復興を遂げ、教育の発展を期すべく、山口総合大學の設置を決定した。この大學は、山口、宇部、長府に分散して設置され、県民から寄附金を募集して、明春四月に開学する。寄附金は、五千万圓を目標とし、県民一人ひとりが、教育の発展に貢献する。山口総合大學の設置は、山口県民の熱望するところである。山口県は、戦後、経済的復興を遂げ、教育の発展を期すべく、山口総合大學の設置を決定した。この大學は、山口、宇部、長府に分散して設置され、県民から寄附金を募集して、明春四月に開学する。寄附金は、五千万圓を目標とし、県民一人ひとりが、教育の発展に貢献する。

総経費は四億圓弱

山口総合大學の設置に必要とする総経費は、四億圓弱と推定されている。この費用は、県民からの寄附金によって賄われる。山口総合大學の設置は、山口県民の熱望するところである。山口県は、戦後、経済的復興を遂げ、教育の発展を期すべく、山口総合大學の設置を決定した。この大學は、山口、宇部、長府に分散して設置され、県民から寄附金を募集して、明春四月に開学する。寄附金は、五千万圓を目標とし、県民一人ひとりが、教育の発展に貢献する。

学部の配置内容

山口総合大學は、以下の5学部を設置する。各学部の配置内容は以下の通りである。

- 文学部：山口、宇部、長府に分散して設置される。
- 経済学部：山口、宇部、長府に分散して設置される。
- 工学部：山口、宇部、長府に分散して設置される。
- 農学部：山口、宇部、長府に分散して設置される。
- 教育学部：山口、宇部、長府に分散して設置される。

加藤助十氏の娘家出

シスエ夫人と名まぬ仲の紳子さん
加藤 からは捜索願も出さぬ

加藤助十氏の娘家出に関するニュース。シスエ夫人と名まぬ仲の紳子さんが、加藤氏から捜索願を出さぬという噂が流れている。このニュースは、山口県民の間で大きな話題となっている。

山口総合大

山口総合大學の設置に関するニュース。山口県民の熱望するところである。山口県は、戦後、経済的復興を遂げ、教育の発展を期すべく、山口総合大學の設置を決定した。この大學は、山口、宇部、長府に分散して設置され、県民から寄附金を募集して、明春四月に開学する。寄附金は、五千万圓を目標とし、県民一人ひとりが、教育の発展に貢献する。

教授次第で設置難

山口総合大學の設置が、教授の配置次第で難航しているというニュース。山口県民の熱望するところである。山口県は、戦後、経済的復興を遂げ、教育の発展を期すべく、山口総合大學の設置を決定した。この大學は、山口、宇部、長府に分散して設置され、県民から寄附金を募集して、明春四月に開学する。寄附金は、五千万圓を目標とし、県民一人ひとりが、教育の発展に貢献する。

高橋定一氏民自

12.7

11.30

最終的に文理、工、経済、教育、農林の5学部で設置認可申請書を作成、県民からの寄附金を募る

年 表

					山口大学前史	県域事項	国内・海外事項
1944年 (昭和19)	官立山口経済専門学校 官立山口高等学校 官立山口師範学校 官立山口青年師範学校 山口県立山口獣医畜産専門学校	山口県立山口高等獣医学校	山口県立医学専門学校	山口県立工業専門学校	「山口県立山口高等獣医学校」を小郡に設置。1 「官立宇部高等工業学校」を「官立宇部工業専門学校」と改称。4 「山口県立医学専門学校」を設立。4 「官立山口青年師範学校」の創設(防府市)。2 「山口高等商業学校」を「山口経済専門学校」と改称。4	山口亀山公園の旧藩主銅像を供出。2 山口銀行設立。3 関門トンネル上り本線開通。複数化。9 米軍機の来襲あいつぎ、男女専門学校生徒・中等学校生徒の勤労動員体制が強化される。 山口市と小郡町合併。4	サイパン島で日本軍全滅。7 学童の集団疎開が始まる。B29東京初空襲。11.24
1945年 (昭和20)					「山口県立山口高等獣医学校」を「山口県立山口獣医畜産専門学校」と改称。3	空襲激化、燈火管制が強化。1 「関門日報」を「防長新聞」と改称。5 光海軍工廠空襲。8 山口軍政部発足。9 米兵1500名山口に進駐。10 協和産業・大洋漁業など産業界の操業開始。 農林省水産講習所を下関吉見に開設する。 竹槍訓練が終わり、県下各地にヤミ市出現、主食の買出しがつづく。 三菱下関造船所で県下戦後最初のストライキ。11	米軍が沖縄に上陸。 東京大空襲。3 米軍が広島・長崎に原爆投下。8 ソ連が日本に宣戦、満州に侵入。 ポツダム宣言を受諾、無条件降伏。 右側通行を実施。11
1946年 (昭和21)					食糧危機のため、山口高等学校の夏季休暇を40日間延長する。9	河上肇死す。1 山口県庁機構改革。2 山口県下、商工会議所を設立。9 下関・宇部などにコレラ発生。9 地方公職追放発表。県下該当者3000名。11	公職追放令が施行される。1 預貯金封鎖と新円切り替え。2 衆議院議員総選挙。婦人参政権行使。4 戦後初のメーデー。5.1 日本国憲法公布。
1947年 (昭和22)					山口県立医科大学の設置が許可され、予科の開設。6	県下最初の婦人警官25名の誕生。2 新制中学校229校いっせいに開校する。5 県下最初の公民館が山口市平川に設置される。5 山口県連合婦人会の結成。6 天皇陛下県下を巡幸。12	教育基本法、学校教育法が公布される。3 六三制の教育が始まる(国民学校を小学校と改称)。4.1 第1回参議院選挙。4 日本国憲法施行。5.3 最高裁判所が発足する。8 フランスで第4共和国が発足する。
1948年 (昭和23)					山口獣医畜産専門学校が下関市長府に移転。12	学制改革により、旧制県立中等学校を全日制高等学校とする。4.1 山口県私学協会の結成。4.1 第1回教育委員選挙。10	国家地方警察・自治体警察発足。3 国連総会で世界人権宣言が採択される。
1949年 (昭和24)	山口大学	山口大学	山口県立医科大学	山口高等学校・山口師範学校・山口青年師範学校・山口経済専門学校・宇部工業専門学校・山口獣医畜産専門学校を包括して山口大学文理・教育・経済・工・農の5学部を設置。5 山口県立医科大学の開設。	関門港が開港。1 高等学校再編成、県下68校を45校に統合。男女共学が33校に。4 デラ台風襲来。6	湯川秀樹が日本人初のノーベル賞を受賞。11 北大西洋条約機構ができる。 中華人民共和国が成立、国民政府は台湾に移る。	

参考資料

- ・ 山口大学三十年史 / 山口大学 30 年史編集委員会編 山口大学 1982
- ・ 山口県教育史 / 山口県教育会編 1986
- ・ 学制百年史 / 文部省 1972
- ・ 山口高等商業学校沿革史 / 山口高等商業学校 1940
- ・ 花なき山の… / 鳳陽会編 2005
- ・ 花なき山の山かげの : 山口大学経済学部65年史 / 作道好男 1970
- ・ 鳳陽新聞 / 山口経済専門学校
- ・ 山口高等商業学校卒業アルバム
- ・ 鴻峯四十年 / 山口高等学校沿革史編集委員会 1962
- ・ 山口高等学校史 / 森田義明・折茂博・石井善之丞編 1968
- ・ 柳桜をこきまぜて : 旧制山口高等学校外史 / 東京鴻南会編 1994
- ・ わが鴻南の日々 / 旧制山口高等学校開校六十周年記念事業会編 1980
- ・ 青春風土記 旧制高校物語 3 / 朝日新聞社 1979
- ・ 健児の胸に燃ゆる火の : 旧制山口高等学校開校八十周年記念文集 / 東京鴻南会 : 1999
- ・ 山口県師範学校創立六十年史 / 山口県師範学校 1934
- ・ 山口県師範教育の遺産 / 村山英雄編著 1982
- ・ 権野の流れ / 毎日新聞山口支局編 山口大学教育学部同窓会 1983
- ・ 青春の学舎に思いをはせて-権水流れて半世紀- : 旧制山口獣医専二期卒業五十周年記念誌 / 旧制獣医専二期権野会 1998
- ・ 角笛 : 山口獣医畜産専門学校第4回卒業五十周年記念誌 / 山口獣医専第四回卒業角笛会 2000
- ・ 山口大学農学部概要 -創立10周年記念-
- ・ 山口獣医畜産専門学校卒業アルバム 第4期卒業 1950
- ・ 山口大学農学部思い出のアルバム潮騒 / 農学科第2回卒業生 2004
- ・ 山口大学工学部五十年 / 山口大学工学部創立五十周年記念事業会記念史部会編 1990
- ・ 山口大学工学部創立40周年記念写真集 / 常盤工業会 1979
- ・ 常盤台今昔 : 山口大学工学部創立 65 周年記念 / 梶返昭二編著 常盤工業会 2005
- ・ 山口大学医学部創立三十周年記念誌 / 山口大学医学部創立30周年記念事業委員会 1975
- ・ 山口大学医学部創立50周年記念誌 / 山口大学医学部創立50周年記念事業会 1995
- ・ 霜仁会歴史誌 : 山口大学医学部創立五十周年記念 / 霜仁会 1994
- ・ 山口大学体育会30周年史 / 山口大学体育会 1984
- ・ 山口大学教育学部付属光中学校史料20年史 / 山口大学教育学部光中学校編 1969

山口県立山口図書館所蔵

- ・ 防長新聞
- ・ 米国教育使節団報告書 / 国際特信社編輯局編 1946



かつての山口大学キャンパス周辺（早間田交差点から望む）

創基 200 周年

山口大学の来た道 4

—山口大学誕生—

2014年 発行 山口大学
企画・編集 山口大学総合図書館内
「山口大学の来た道」編集委員会



「志」つなぎ 伝える 二百年